人の心に在りとすれば、人は天地間から全く罪を無くすることが出來るのである。

六　罪の結果

六、罪の結果

罪がどうして惡いかといふことは、其の結果から分つたのである。此の惡い結果を起して居るものは何か、何所に此の惡い結果の原はあるかと探つて、人の心の奥まで辿つて行き、其所から湧き出して居るのを見たのであるから、罪の結果の惡いことは初から分つて居る。が罪の結果は人の氣のついて居る所にも、其ほど氣のつかぬ所にもあつて、其の氣のつかぬ所に甚だ恐ろしいものがある。

天地の毀損

罪の結果は先づ此の天地を毀して居る。神の造つた天地であるから、神の心に反したことをすれば、此の天地は毀れるに相違ない。天地萬物が直接に人の

罪のために傷つけられ、發達すべきものも發達しないで居ることも多いであらう。無暗に山を荒したり、河を荒したりするし、生物の如きは隨分人の罪のために苦を受け、用のない一生を終ることが多いであらう。が間接に人と人とが互に相害するため天地が傷つけられることに至つたら夥いであらう。もつと人と人とが神の心に從ひ、正しくあり相愛するならば、此天地は更に立派になるにきまつて居る。

社會の破壞

次に人の罪が人の社會を破壞して居ることは、是は言ふまでもない。もし罪がなく、みな神の心に從つて生きて行くならば、人の世は如何に美はしく如何に幸ひであらうか。然るに罪あるが故に人の世は諸の不幸や悲慘で充たされ、眞に住みつらい。人の罪は恐ろしい破壞力を以て、人の幸福を亡ぼし、個人を禍し、社會をいためて居る。家は如何。村は如何。國は如何。世界は如何。何所を見ても慰められる所はない。

自己を傷つく

三には罪は自分を非常に害する。淺い所から言はゞ、罪のために病氣になるものもある、家を夫ふものもある、世間に信用を無くするものもある。斯くて自分は此の世界に生き難くなつて來る。此れも罪の自分に及ぼす結果である。然し罪が自分の精神を害するに至ては言ふべからざるものがある。罪は人の靈を萎微させる、終には之を亡ぼして仕舞ふ。一體人の品性といふのは心に癖のついて仕舞ふたことである。人の靈も癖がつく。丁度手を餘計つかへば手が發達するやうなもの。右の手ばかり餘計つかへば右の手が餘計發達し、何事にも右の手を用ふるやうになる。鎮西八郎爲朝は弓が上手なため左の手の方が長くなつて居たといふ話もある。心も矢張さういふもので、或る方に向つて多く動くと其方に動き易くなる。また譬へれば山の上の水の流れて谷が出來るやうなもの。山の上の水は始め少しばかりの窪地を指して流れた。一番の初は縷のやうであつた。所が次の雨の時にも水が其方を指して流れ、其所は一層深く凹む

た。三度四度重なるに從つて、窪は益々深くなり、水の流れは益々嵩を增し、其から段々と進むで谷が出來。終には深い淵も瀨も出來て幽谷となつて仕舞つた。人の精神もさういふもので、善いことをして度重なると、精神がさういふ形になつて仕舞ひ、善いことがし易くなる。此れが善い品性になつたのである。之に反して惡を行ふと、度重なるに從つて精神が惡い形になつて仕舞ひ、惡い品性となる。例へば嘘を言ふのにも、始めて言ふときは大變六かしく恥かしい。二度目には稍易くなる。三度四度となると平氣で言へ出す。終には嘘の方が言ひ易く、眞は言ひ難くなる。さうなれば其は嘘つきといふものになつたのである。萬事かういふ風に、人の精神は罪を行ふと善い所が衰へて萎微して行く。惡を行ふまいと思ふても行ひ、善を行はうと思ふても行へなくなる。其が極まつて、凡て善となることに何の感じもなくなり、善を行ふ力が全くなくなり、神の心に合つた生活が全く出來なくなつて仕舞ふとき、其が靈魂の死である。

霊魂がなくなつたのではないが、有ても霊魂の用をしない。此は霊魂の死骸ではないか。聖書の中、特にパウロの書翰の中に霊の死と言てあるのは此である。罪の自分に及ぼす結果は終に此に至るのである。

神との間を絶つ

然し何よりも恐ろしい罪の結果は、我等と神との間を隔て、終に之を絶つて仕舞ふことである。神は父である。極まれる愛を以て我等に臨むのである。神は怒におそく、人間が如何なる事をしても赦して之を愛する。基督も左樣見て居る。然しながら神は愚な母な自分の子のすることなら何でも可いとして居るやうにあるべき筈はない。神は自ら正しい。一點の不義も邪もない。さうすれば人が罪を犯しつゝ神と全く一心同體となり得る筈はない。其が出來たら神は心のないものである。又自ら不義なものである。人が罪を犯す間は、神と合ふことは出來ぬ。そこで神の子たる幸は到底得られぬ。平和もない、喜もない、人を愛する心もない、此世の中で色々の清い幸ひ、未來の限りない生命、

そんなものは有たれない。それで神と離れて居なくてはならぬ。此れが何よりつらいことである。神の方には別に人が罪を犯すから讐を返してやらうといふ心もないであらう。然し人の方が神に合ふことが出來ぬのである。之を基督は喩へて外の暗黑に投げ出たされて、其所にて悲み切齒すると言た。實際人が神と一致し一つ心となることが出來ず、喜びもなく愛もなければ、神を背後にし、神のない所、神の光のない所に立て、獨り寂しく、自分の惡のために心を惱ましし、苦み悲み永遠に切齒して居るのである。其の暗はいつまでも明けはしない。此の不幸は人間同志の事に比べても推し測られる。例へば一の家の中で、父と子とが心よく合ひ、兩方の志が互に調和して居る時には、子は我家の中に居て實に樂しく、自分の心は父の心であるから、家の中隈なく我心が充ち、自分は家一杯にひろがつて居る心地がする。所が一朝子が父と心が合はなくなつたら如何か。たとひ家の中に居て父と顏を合はせて居ても、自分ははや家か

ら閉ぢ出だされ、家の中の何所にも自分は居ないやうな氣持がする、又實際自分の精神は家の中の何所にも容れられて居ないのである。そこで父子は顏は合はせながら心では千里の遠きに居て、心が通じ合はず、二人の間には底なき淵が横たはつて居る。此れほど子に取つての苦痛はあるまい。其の如く人は此の天地間に居て、神の子であり、天地は我家であり、神は常に我と共に在るのであるが、自ら罪を犯し神の心の反して居れば、自ら求めて神と心が背き合ひ、其間に千里ただならぬ隔てを置いて、自分の心には光明もなく、溫りもなく、さながら寒い冬の晩に、外の暗い所に投げ出された心地があるに違ひない。人の靈は罪を犯して居る間は、確に神と斯く隔たり、神の子たる幸を得ることを出來ずして、淋しく悲しく、無限の苦しさを覺ゆるに違ひない。基督は更に之を無間の地割の底の燃ゆる火の中に投げこまれて、其の火永久にきえず、其の蛆永久につきないものに譬へた。實に罪を犯して其のまゝのものは、其の靈が

永久に神のなき所にて、自分の罪の思ひや慾のため燒かれ蝕はれ、たゞ苦しさに堪へられぬであらう。之を靈體の滅亡と言てある。

之を罰といふ

以上が罪の結果である。之を罰といふ。罰とは神が人の惡に對して復讐をすると云ふのではない。人が罪を犯すときは、必ず自分の身に報うて來る結果をさしたものである。罪を犯すときには必ず社會を毀し、自分を破るやうな結果が起る。此れは天地の成立であつて、神は天地を斯ういふ風に造つてある。だから罪を犯すものは必ず罰を受けるのである。

理想と實際の隔り

以上言た如く、人は誰も彼も罪を犯して居り、人類一般に罪あるものであつて、又みな其の結果を受けて居る。即ち社會には不幸悲慘が多く、自分自身は禍にかゝり、又精神が萎微し沈むで行き、終に神と意志が通せぬやうになり、神を思ふの心もなくなり、神の正義と愛の德とは自分の心の中から引き去て仕舞つて、神の子たる面目は全く失せ、其の罪は一點も受けられず、死の中、

苦みの中に呻吟して居る有樣である。此れが人の實際の狀態である。之を人の理想に照したなら如何に其の隔りの遠いことぞ。神の子たるべきものが斯くの如き有樣といふのであるから、理想が高い所にあるほど、悲慘の度は甚だしいのである。

そこで人は此のまゝになつてはならぬ。こんな無理な狀態、悲慘の中に滿足して居てはならぬ。このあるまじき有樣から移されて、人のあるべき有樣に歸り、かくて諸〳〵の無理や悲慘から脫れ出で、人として有つべく、神の子として有つべき幸福を享けねばならぬ。人を斯くするのが救である。

第四章　基督の救

一　救の途

一、救の途

人は神の子である。故に自然の力よりも以上に出で、靈の自由を用らかせて神を信じ、神の心を行ひ、人を愛して生き、其に由て今生の幸、未來世の幸を限りなく受くべきものである。然るに人は自分自身の心一つから神に反したことを志し、其がために諸〳〵の惡を世の中に起して、諸の不安心、苦み、悲み、痛み、惱み、其他かゝることを我にも他にも蒙らせ、神との關係は絶えて、自ら神の愛を信じて之に賴ることも出來ず、神の美くしい德の感化を受けて、精神清く高く愛に充つるといふことも出來ぬ。斯くして日々に衰へ、日々に不幸の底に沈み行き、靈魂の死を急いで居るのである。

みな救を要す

是れ實にあるまじきことである。仰げば人の理想は神の懷の中にあつて、其の幸ひや無限である。之と照して見れば、あゝ太くも墮ちたるかなと嘆息せざるを得ぬ。其で人は此の實際の哀れなる狀態から脫け出で、其の理想の光榮と幸との狀態に到らねばならぬ。もし此のまゝで終るならば、我等の生れた意味は無に歸する。天地の進化も中途で止まつて仕舞つたことになつてまた意味の無いことになる。天地は上に向いて進むで居る。人の靈も上に向いて進むで來た。然るに中途で挫折して仕舞つては、今までの進歩は何にもならず全く意味をなさぬ。我を囚へ我を陷れるものを打ち切つて、ずん〳〵上に進み、理想に達せねばならぬ。

救の途種々

古より精神の大いなる人格の考へた所此所である。彼等は人の實際の有樣を見て嘆いた。人の實際の有樣は其の在るべからざる所に在るものである、此れでは可けない、どうかして之を改めて其の在るべき所に上らせなくてはならぬ

知識を以て救はんとする教

さうすれば人生の諸の不幸は拭ふが如く去られるのであると、斯う思ふた。そこで色々之を救ふ途を考へたのである。

先づ其の救の道は物の道理を知ることにあると思ふた人もある。ソクラテスなどもさうで。人が惡いことをするのは物の道理を知らないからで、知つたら惡いことはしない、だから惡いことは惡い事だと知らすれば可いと考へた。即ち知行合一であつて、東洋でも王陽明の言ふ所などは之に歸する。けれども人に知識を與へたとて人は決して善くならぬ。知識の木は生命の木にあらずといふ語もあるが、これはなすべき事と知つたからとて行へるものでなし、是はなすまじき事と知たからとて止められるものではない。もし其が出來たら世の中が進めば世の中が善くなる筈である。所が知識が一般の人に行きわたるに從つて、人は却つて惡くなる傾もないではない。教育が普及し、交通が便利になつた土地ほど人柄が惡いのは事實である。少くも知識は人を善くして居ないだけ

は確である。哲學者ショーペンハウエルは言た、世界の善くならないのは決して人が物を知らないからではない、知て居て行へないからである、即ち意志が變らないからであると。確に知識を與へたとて人は罪から救はれず、罪の結果から免れることは出來ぬ。

そこで或は意志を鍛へて立派な人物にし、其で罪と罪の結果から救はうとする人もある。即ち自分でこんなことはしてはならぬ、こんな事はしなくてはならぬと思ふことを、何所〳〵までも實行し又は排斥して行くことである。道德といひ修養といふものは皆これである。彼等は人間の守るべき道は斯く〳〵である、人の行ふべき德はこれ〳〵である、人のなしてはならぬ事はこんなことであると、一々其を定めて置いて、其に從つて行く。五常などいふものを立てたり、四大德などいふものを思ふたりして其れ〳〵精進する。儒敎とか武士道とか、又は希臘あたりの道德家の道とかは之に外ならぬ。宗敎でも基督の前五

百年頃から後の猶太敎の如きは其に傾いて居た。神に事ふる道、人に對するの道を、細々しく誡律や律法にして、其を隅々まで守らうとし、其によつて義を得やうとし、神に喜ばれやうとした。印度でも多くの人は難行苦行して、煩惱から離れ、解脫を得んとしたのである。然しながらこんな道德や宗敎で果して人が罪から救はれ罪の結果を免かれることが出來るであらうか。誰も其の難きを嘆ずるのである。難行苦行して、果ては自分の肉を鞭うち、血の出るまでに至つても、人は罪の無いものとなることは出來ぬ。いよ〳〵罪多くなることを感ずる。猶太敎のパリサイ宗に屬し、嚴格な敎育を受け、自分また律法の一點一劃も欠かすまいとしたパウロは、律法はみな守れるものでなく、却つて律法は罪を誘ひ出すと嘆息した。バンヤンの『天路歷程』の中には、猶太敎の律法誡律をシナイ山と呼び、其の山は嶮しく、人の天に行く前途に塞がり聳えて、今にも崩れかゝらんとして危險この上もないと描いてある。道德や律法がさう

末々まで守れるものでなく、其を守らねば立派な人にはなれぬ。罪を脱せぬ、神の子ではない、幸を得ることは出來ぬ、永遠の滅亡に留まるといふならば、人は皆な失望して仕舞はねばならぬ。もし又萬一律法が悉く守られて、行の正しい人になつたからとて、其で立派な人物かといはゞ其が左樣でない。一體そんなものは外面の事である。形のことである。外面の上、形の上では眞に美くしく虫も殺さぬやうな風になつたからとて、心は非常に殘忍にして、汚れて居ることは多いのである。禮記や小學や乃至は女大學の中にあることを一點洩らさず守れたとて、品性が惡ければ何の價があるか。所がそんな事を守りさへすれば可いと思ふと、唯だ形を整へるに一途にして、品性を思はないから、頗る下劣な品性の者になるのである。基督の時代のパリサイ宗の如きは、律法誡律さへ守らば天晴の人間だと思ふたもので、成程其はよく守れたけれど、内心は甚だ醜く、基督の目には白く塗りたる墓のやうに見えたのである。斯ういふ事

では人は救へぬ。彼の徒らに修養を唱へたり、又は陳腐の忠君愛國主義などで人間を率ゐて行かうと思ふ者などは、其の全く力なく、却つて人を賊ふことを覺つて、大いに改めねばならぬのである。

そこで宗教には罪の祓といふことをして罪の結果たる禍から免れやうとする思想がある。どうせ人間の力では罪を除くことは出來ず、其の結果を免れることは出來ないから、咒の如きことをして罪を祓ひ去らうとするのである。アラスカの或る島の野蠻人の中には、何かひどい罪を犯した時には、一種の雜草を取て其を身につけ、其に罪を移したと信じ、太陽を證人として其前で之を燒いて罪を去つたと信じて居る者がある。其外にも自分の罪を何か物體に移して、其を燒いたり流したりする習はしは澤山ある。我國の古代よりの習慣となつて居る大祓も其の著しい一つである。六月と十二月の晦に大中臣が、あらゆる天津罪國津罪を告白し、其を天津神國津神に祓ひ給ひ清め給ふことを宣れば、天

神は天の磐門を推し披き、天の八重雲を披きて聞き、地神は高山の末短山の末より伊穩理を搔き別けて聞くべく、さすれば天が下四方の國には罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を舳解き放ち艫解き放ちて大海原に押し放つ事の如く、をちかたの繁木が本を燒鎌の敏鎌もて打ち掃ふ事の如く、遺れる罪はあらじと祓ひ給ひ清め給ふのである。其の掃つた罪をば如何にするかといへば、凡ての高山、短山の末より倒に落つる速川の瀨に居る瀨織津比咩といふ神が大海原に持ち行き、其を荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に居る速開都比咩といふ神が呑むで仕舞ひ、更に其を氣吹戸主といふ神が根國底之國に吹き放ち、其を速佐須良比咩といふ神がさすらひ失ふのであると信じて居た。彼等は祓の大幣に罪を被せて、之を流したのである。之に似た習慣ではニユージーランドの或所では、或る一人を選び羊齒を身につけさせ、之に罪

を負はすれば其者は河の中に飛びこみ、羊齒を解いて仕舞ひ、其が流るゝのを見て罪が去つたとした。或は生きた動物に罪を負はせた例も多い。印度では婆羅門僧が牝牛に罪を負はせ、之を其の命ずる所に引き去らせる。太古の埃及にも牡牛の首に凡ての禍を負はせて之を殺すやうなことがあつた。猶太に於ては罪の念が最も發達して居たものだから、宗教の儀式には罪を贖ふためのものが甚だ多かつた。猶太人は其の罪に從ひ、種々の犧牲を神ヤーウエに献げて、其の罪を除くことを計つた。其でも滿足せず、一年に一度猶太の曆の七月十日には、贖の日といふを守り、大いなる祭をなし、祭司長は人民を代表して神殿の至聖所に入り、羊を殺して其の血を祭壇に濺ぎかけ、其で罪を贖ひ、更にアザゼルの山羊といふに祭司長が手を觸れて人民の禍を之に負はせ、遠く曠野に放つことをした。然し野蠻人の中には、罪を贖ふため、又は禍を除くために、人間を生贄にする者もあるのである。暹羅では毎年惡い事をした女を探し出して、

市中を引きまはした後、あらゆる侮辱を加へ、生命もないやうにして土地から追ひ攘つて仕舞ふ。ニゲリアでは奴隷の少女を苦めた揚句河に投げこむ。みな罪の報を除くためである。然し此等は勿論幼稚な思想から來て居ることであつて、物體や動物に手でも按けば、其で罪が移ると思ふ所から來て居る。そんな道理のあらう筈がない。罪は人が一人〳〵自分で犯すものであるから、其の報いは自分が受けねばならぬ。移さうとて移るものではない。もし又罪が他のものに移つて、罪の報いは來ないやうなことになつたにしても、其は極めて間に合はせのことであつて、どしどし後から罪を犯して行くならば、いつまでたつても罪から脱れることは出來ぬ。罪の報いを除いたとて罪を除かねば人は救はれぬ。人は罪を犯さないやうにするのが眞に人を救ふのである、さうすれば固より報いも來やう筈がない。

罪は我等の内に根を有たものであるから、其の根を絶てば葉は枯れるのであ

る。そこで釋迦は其を見て取て、我等は我といふものを無くすれば罪はなくなると言た。釋迦の考へでは、我といふものは本來無いものである、其を人は我といふものがあるかの如く思ふて居る、そこで我を本として色々の慾を起し煩惱を生ずる、其が諸の苦の本である、だから我は實に無いことを覺れば、其で諸の煩惱は消滅し、苦もなくなるのである。釋迦は此の覺りを開いて、我を無くして仕舞へば阿羅漢果を得て、もはや再び天や地に生れ、苦を受くることがない、全く業より脱して涅槃に入ると思ふた。人が思を凝らして凡ての慾を去り、無爲恬澹の境に入るといふことは出來ぬことではない。成程さうすれば別に人を害し己れを害するやうな心も持たないから、罪といふものも無くなるであらう。けれども此の樣な途は決して救の途とは言へぬ。これは支那の譬にある馬鹿者の途と同じ方法である。或馬鹿者が駿馬がほしいといふので、遙々遠國に行て大金を出して其を買た、けれども遠い途を牽て返るも面倒と思つて、

馬を燒いて骨ばかりにして持て歸つたといふのであるが、人間の罪を救はうして人間を無いものにしては役に立たぬ。成程諸慾を亡ぼして仕舞へば人は美くしいやうだが、我ありと思ふてはならぬとあつては、我れ實に人を幸にしなければならぬ、善を行はねばならぬといふやうな者もあつてはならぬのである。勿論あまりそんな事にも小さな我意を張り立てるはよろしくない、寧ろ人は善をしやうと思はずして善をするやうでなくてはならぬが、總じて善なる志をも無くしなくてはならぬやうなことでは、人が品性に進歩がある筈はない。人は善を思ふことい よ〳〵緻密活潑にして、いよ〳〵品性が高くなるのである。又人類社會が幸福になり、進歩するのである。釋迦のやうにしては、罪は無くなるかも知れぬが、人の性といふものが縮むで仕舞ひ、人類社會が萎微して消滅して仕舞ふ。勿論釋迦の考へでは我といふものが元來無いものだからさうなるのは當然である。加之、其の我といふものが無いものかゝ既に問題である。

今の學者は矢張普通の人と同じく、我といふものを無いとされぬと言ふのである。他の萬物は不確としても、我といふものだけはある。此れは動かすべからざる事實であつて、此れで凡ての事が考へられるのである。

そこで其等の諸の道德や宗敎では、人が罪から救はれるといふことは非常に不完全で覺束ないのである。然らば人はいつまでも罪を犯し、其から脫することが出來ず、其の恐ろしい結果を受けねばならぬのであるか。

二、基督敎人を救ふ

基督敎はそこを救ふのである。基督敎は罪ある人を化して神の子たらせるものである。神の子の實をもたせ神の子の幸をもたせるものである。其で人を救ふのである。此れは世界の事實である。他の宗敎に於ては救はれない人生の不幸とか悲慘とかは、事實に於て基督敎に由て救はれて居る。他のものでは罪が

取り除かれて人が立派な人格となれないのに、基督教に於ては其が出來て居る。他の事に由ては人は中々神と一致した確信がもたれないのに、基督教では其が持たれて居る。何所に基督教の如く人を實際の惡の狀態から理想の善と幸福の狀態に到らせ、神との關係を正しうしたものが外にあるか。

神の子たる自覺を與ふ

先づ第一には基督教は人に神の子たる自覺を與へて居る。印度の人々は自ら梵天と同じだといふことを思はうとするが中々思はれない。一般の人民は梵天の現はれたるものとして、億萬にも上る神々を信じ、其の著しいのを拜むで居る。然るに基督信徒は如何なる匹夫匹婦も、我は神の子である、神は我が父であると覺り、神を崇むると共に、神の惠みの己れの上に溢れかゝつて居ることを感じて、恐れもなく、憂ひもなく、唯だ喜びと勇氣とに充ちて居る。其のみならず、自分と神との間にはは や隔りのないことを感じて居る。自分の內には神の心を與へられ、自分の心は神の心に由て動いて居り、光と光と相照らして、

其は同じ光となつて居るが如く、一滴の水が葡萄酒の中に落ちて、色も味も香も葡萄酒となつて居るが如く、神と一致して居る心を有て居る。パウロは汝等の靈は奴隸たる者の如く再び恐を抱く靈に非ず、アバ父よと呼ぶ子たる者の靈なりと言て居る。讃美歌を見よ、我等は神と和らいで其の間隔てがない、神の光心に溢れる、神の喜び心に充つる、此世の荒き波風の中も恐れはない、主の手にひかれて行くといふ意味の者が頗る多い。基督信徒が事實の上に平和であり、勇氣があり、死ぬる程の困難をも冒すことを辭せず、いつ死でも可い氣で居り、死ぬる時には勇むで歌を歌ふて死ぬるし、其他萬般に於て他と異る所があるのは、其の心に我は神の子であるといふ自覺があるからである。他のものに由ては得られぬ神の子の自覺を、基督信徒は基督教に由て得て居る。

神の子たる實を現ふ

然しながら自覺は時として實と違つて居ることがある。巢鴨の病院には自ら芦原將軍と名告る狂人が居る。大變えらいものゝやうに自覺して居る。日露戰

神と云ふ人格者は人生の感情に依てつくられたる虚無の存在にして之は已に理がある。みたい。

爭後に我國の宗教熱が昂まつた時、そこ〳〵に預言者と自稱する者が現はれた。其の中には自ら未前の大預言者と思ひ、釋迦も孔子も基督も過去の預言者であつた、然し今は既に其の用を了へた、今は此の預言者に聽けと叫むだ者まであつた。其の自覺はえらかつたが、然し今果して如何。全く僞預言者の運命を逐ふて何處に行たか分らなくなつた。これは實がないからである。預言者自身は如何なる教を說くのか、如何なる品性を有するのか、さつぱり分らないからである。基督信徒も單に神の子供といふ自覺のみならば一向あてにならぬであらうが、然し基督信徒には實がある。彼等は基督教に由て、神の子の品性を與へられ、神の子の行爲をさせられて居る。勿論信徒はまだ弱い恥かしい至りであるが、然し一點新しくなつてもはや搔き消すべからざる神の子の生命がある。即ち心の中に神の正義の德がさしこむで居る。戶を閉ぢた暗い室の中に、節穴から日の光がさしこむで居るやうなもの。唯だ一條と雖も神よりの正義である。

其から神の愛も湧き出て居る。基督教を奉ぜざりし前には無かつた愛の心が、底から自分の內に湧いて出て居る。そこで平和でもあり、又勇氣もあり、生活の萬端が前とは異つて居る。此れは何所にもあり、誰も見る所の事實ではないか。

此れ救ならずや

我は神の子だと自覺して安心もすることが出來、自ら重んずることも出來、萬事を淸く正しく力强く行ふて行くことも出來、慰められ奬まされもするし、心に喜びが充ち、愉快が溢れる。又神の子の品性を以て正義と愛にて充ち、凡てすること爲すこと、みな此の品性から出て來ることなるが故に、自分自身には苦痛なく、自分の人格は其でいよいよ伸び展かり、色々の點に幸福になり、更に家を幸ひにし、社會を幸ひにし、世の中が愛と喜びにて成り立つやうになる。斯うなれば我等の心には罪が無くなるし、萬人が斯うなれば世の中から罪は無くなる。從つて罪の結果のあらう筈がない。罪と其の結果とは根本から取

り去られたので、人は救はれたのではないか、此の外に救はないのである。

世の中に不幸や悲惨の數は限りがない。そこで人を救ふといふときには一寸手のつけやうのない心地がする。右を救へば左が洩れるし、前を救ふても後が殘つて居る。之を悉く救ふといふにはどうしても途はないやうである。そこで多くの救拯は其等の禍の或るものを救ふて滿足するのである。然し其では人を救ふたものとはいへぬ。救はれた禍より他の禍は殘つて居る。宗教でも動もすると人間の或る所だけを救はうとし、其で救ふたと思ふて居ることがある。基督教徒でも、未來の神罰から免がれさせてもらへば其が救ひだと思ふ者が多い。我等はみな神に逆つて居るから、未來には必ず神から罰せられる、其の罰を免れさせてもらへば可い、基督は贖の羊の如く我等の罪を負ふて、我等の代りに罰を受けて死だから、我等は罰を受けずにすむやうになつた、其が救であると思ふのである。言ふまでもなくそんな事は人間のくつ着けた理窟であつて、神が

そんな理由で基督を死なせたか如何か何も明に分つては居ないのである。唯だ人間が自分の方から考へて、基督が十字架にかゝつて死だのは、屹度猶太の祭に羊に罪を負はせて殺すから、その羊のやうなものだらうと推察した推察なのである。然しよしや基督はそんなために死だのにしても、其で人は救はれたのではない。成程それで人の未來に受ける罰は免れることが出來るかも知れぬが、唯だ罰を免れたとて、我等本人が尙罪を犯す人間であるならば、基督に由て少しも救はれたのではない。神の未來の罰だけは免れても、自分の精神は依然として萎微し、罪を重ねれば益々神に遠ざかつて行くし、不安であり、色々の禍を受けねばならぬ。さうして見れば此の樣々なる人生の禍を全く除いて、人を根本から救ふ途はないのであるか。ある、大いにある。基督教の救は實は其である。其は何故ぞ、基督教は人を新にするからである、人格を救ふからである。基督教は罪ある人を生れ更らせて神の子供にする。即ち人格が變つて仕舞

本　人格が萬事の

ふ。そこで凡ての禍は取り去られて、人は無限の祝福に充たされるのである。

一體人格は萬事の本である、人格が定まれば萬事が出來るのであり、人格が定まらねば、何をしても定まらぬのである。例へば放蕩息子があつて親の財産をば失つて仕舞ひ、他人にも迷惑をかけたとする。其を救ふといふに當つて、或は負債を拂つてやつたり、人の所に行て詫びてやつたりして、兎に角本の鞘に納まつたことになる。其で人は放蕩息子を救ふてやつたと言ふ。けれども其の救たるや單に外部の事情を旨く治めてやつて、其の結果から免れしめたと云ふだけであるから、極めて淺薄で無能である。成程その時には其だけの事情より救ひはしたが、放蕩息子はやがて第二の事に出遭ひ、第二の惡を行ふのである。其を救ふてやれば更に第三の惡を犯す。かくて親はくる〳〵彼の歩むだ後を歩むで、彼の尻を拭ふて果しがない。然るに茲に其者の人格を救ひ、之を立派な品性の者にするならば、もう第四第五、千萬の誘惑が來ても彼は大丈夫で

ある。彼は茲に於て全く救はれたのである。

人格が凡て人の一々の行爲や生涯に意味をつけ價をつける。立派な人格から出る事ならば其は必ず價のあることである。人格の惡い者のすることなら大抵惡いことである。同じことをして同じ結果が起つても、人格の高下で以て其の事の價が異る。耶蘇は十字架にかけられた。耶蘇と共に二人の盜賊も十字架にかけられた。同じ日同じ時同じ樣で死ぬのである。然し基督の十字架には人間を神の子供にしやうとする神の活動の結果又其の現はれといふ意味が確にあり、盜賊のは爲しことの報い、至て意味の淺いものであつた。結果が他人の幸になるやうな行をしても、品性が惡くして惡い心を以てしたものと、品性の高いもののした事との間には、大いなる差別がある。人をして善といふ意味のある行をするに至らせるには人格を美にするのである。人格さへ美ならば、其の行ひに多少は不幸の結果を齎らすことがあつても、其は恕されるのである。

人格さへ定まらば萬事は出來たのである。前に言た放蕩息子の例で言へば、其の本人の品性が高くなつて來さへすれば後の生活は一々節に合ひ、再び苦痛を受け不幸に陷ることはない。或は過去の報いは尙身にまつはり、一生涯其が脫し切れないやうなことがあつても、其を正しき心で受け、其に由てます〳〵戒め、心を淸くして行くものであるから、萬事實に幸となつたと謂はねばならぬ。人格さへ立派になるならば神は喜むで之を愛し玉ふ。其に決して罰を與へるなどいふことはない。たとひ過去がどんな人物であつたにせよ、現在すでに改まつて別人となつて居るものを神が罰する筈はないのである。

人生の凡ての不幸悲慘は人格を立派にすれば濟はれる。自分自身の惡い思想も行も、人格が高潔になつたら起らう理がない。家の不和などもさうである。社會も勿論さうである。凡ての罪は人格が造つて居る。人格の造つて居る物でなくば罪ではない。人格を救はば世は救はれるのである。

基督敎は人格を救ふ

基督敎は此の萬事の本たる人格を救ふ。罪を犯し低い思想を持ち間違つた品性を持て居る人をして、心を飜へして神を思はせ、正義を慕はせ、愛に充たせ、神と同心一體にならせ、神と共に動かさせる。此れ明に人の人格に變化を與へるものではないか。人格が變化すれば萬事が變つて來る。其の人の生活は全く新しいものとなり、別人となり、新生命を發揮するのである。基督敎の救は茲にある。

故に萬事が救はる

故に人生の凡ての禍は取り去られるのである。人が別人となつて神の子となつたら如何であるか。例へば病のために蒙つて居る不幸の如きも取り去られるに違ひない。精神が神を信じ神に委せ神の惠を感謝し、人を愛するといふ風になつたら、死を恐れる心もなくなるし、色々の煩悶もないから、身體の病氣もよく大抵ならよくなるであらう。不信仰の者惡念に充つる者はよくなる病氣もよくならぬのである。然し壽命の如きは致し方のないにしても、人格が神の子とな

つて居らば、安心もして居るし、病苦にも堪へるし、看病人をも勞はるし、喜びも持て居るから、もはや病より受ける諸の禍は去られたと言て可い。其外の不幸でも左樣である。財産を失つた所で、神の子の人格を持て其中に處するならば、其の不幸より來る禍は受けずにすむ。却つて其の不幸に由て靈を鍛錬されるやうなことになる。人は煩悶を取り去りたい、平和を得たいと求めて居るが、其は基督教に由て人格を神の子にされさへすれば得られるので、即ち其の禍を救はれるのである。

其から自分の德の足らぬことを嘆き、自分は善をしやうと思ふても出來ず、惡をすまいと思ふても其をするといふて殆ど心も狂ふばかりになつて居る者も修養などでは中々其が救はれないが、基督教に由て人格を新にせられゝば、自づからにしてそんな弱いことはなくなつて行く。例へば酒を飲むやうな癖から言ても、惡いと知て其を直さうとするけれど中々六かしい、何度企てゝも破れ

る、禁酒會にも入て見るが駄目だ、殘念でたまらぬ、其が基督教を奉ずるときには自然に人格が内の方から新らしくされるものであるから、別に酒を止めやうと外から努力しないでも、酒を飲まうと思はなくなり、止めやうとすれば直ちに止め得る力が何時の間にか出來て居る。他の事でも萬事さういふものである。

人格が新らしくせられて神の子供となれば、自分自身の靈魂は決して萎微することのある筈はなく、善をなすの力を失ふて仕舞ふやうなことは無論ない。天地は神の造つた天地である。神の在す天地である。神の子となつて生されば自分は天地の間に最もよく發達し、自分は天地一抔にひろがつた心持になれる。又神の子供となるならば、世の中に立て不都合のある筈もない。一時は此世の才子などに負けるやうなことがあるかも知れぬが、彼方は目前の狹い所で通用するにすぎぬ。少しく廣い所長い所では忽ち躓いて仕舞ふ。此れは永久に何所

にでも通ずる品性であり主義である。世の中の色々の不幸より救はれるは當然である。

人がみな神の子供になるならば、社會は如何に美はしいであらうか。どこに禍があらうか。何所に不幸があらうか。世界は基督教に由て救はれるのである。

既に神の子とせらるれば、未來の罰からも必ず救はれるは當然である。神は罪を悔い、心を改めて神を慕ひ、神の心に從ひ、神の心を行ふ者を未來に於て罰する理がない。よしや過去にはどんなひどい罪があつたにしても、其をば改めて新しい心となつた、自分では別人となつたのである、愛の神が其を罰する筈はない。又罪に必ず伴ふ色々の惡い結果も、もはや精神にはかゝつて來ない筈である。肉體は自由がない。自然の法則から支配せられる故、一旦犯した惡の報いは肉體には必ず報うて來るが、精神は心を向けかへて改まつたが最後

もう別人になつたのである。何となれば自分の人格は中心が違つて居る。前に持つて居たやうな心は逐ひ出された。少しは殘つて居てももう隅の方に押しやられた。今は新い心で充ちて居る、凡ての行き途が變つて居るからである。で左樣なつた人に舊い時代の報いが逐ひすがつて行く筈はない。世間の人々は尙心を見ることが出來ないから、自分を舊の人の時と同じく取り扱ふであらうが、自分自身はもう變つて居る、靈を見て靈を扱ふ神は自分を別人として扱ふし、凡て舊い時代の報いは來ぬに相違ないのである。

それで神の子とせられて人格を一變されたものは、全く自分を救はれたのである。

三　救は基督の人格に由る

基督教に由て人が根本から救はれることが事實とすれば、其は何に由て〝ある

か。其は一個の人格耶蘇基督に由るのである。基督は實に人を救ふことを一生の目的とせられた。彼は自分の生れたのも死ぬるのも全く人を救ふためだと信じた。

三、救は基督の人格に依る

基督の一生は救のため

基督は人間の最小さき者の一人の亡ぶるは天の父の御心に非ずと言はれ（馬太傳十八ノ十四）、我が來るは義なる人を招く爲に非ず、罪ある人を招きて悔い改めさせんがためなりと言はれた（馬太傳九ノ十三）。基督は人間が自然の力に囚はれ、肉慾の器となり其がために天父なる神と一に合ひ、其の限りなき幸福を受けることが出來ずして、唯だ罪を犯し、常に苦み惱みに取り圍まれて居るのを見て、其を救はうとして活動かれたのである。基督は自分が世に生れたのは、唯だ此の人を救ふために神から遣はされたのであると確に信じて居た。今日我等から見れば、此の基督の信仰は其の通りである。基督の一生は人を救ふためにあつたので、其の生れたのは人を救ふために生れたのである。

耶蘇基督は此の救のために隨分骨を折り玉ふた。彼は方々を巡つて教を說いた。又其の行く所で病氣のもの不具のもの、其他不幸の者があれば、御自分の手を下して其を助けてやつた。又後々まで此の救の働きをするやうにといふので、弟子等を引き寄せて之を養ひ御自分の精神を吹き入れ玉ふた。そこで休まない事も、眠らない事も、物を食べないことも度々あつた。敵對が非常に激しくなり、味方は段々減つて行て、生命までも危くなつたけれど、少しも慮せず屈せず活動いて、到頭十字架にかけて殺されて仕舞た。基督は實に其の生命を代價にして、人の救を買ふたのである。自分でも人を救ふ代價としては死を拂はねばならぬといふことを覺つて居た。

確に基督の人格に由て、人は罪ある者が其の人格を新らしくせられ、神の子供とせられ、其に由て救はれるのであるが、然らば基督の人格は如何にして我等を救ふのであるが。基督には色々の力があつて人を救ふのであらうが、私に

最も強く感ぜられるのは、三通りの途に由て現はれる力である。

基督は天父を示して人を救ふ

其の第一は基督は我等に神を示して、其で我等を救ふ。確に神は天の父であることを我等に示したものは基督である。

先づ基督は其の教で之を示し玉ふた。神は天の父であると教へたのは世界で基督が初めである。成程他の教にも左樣いふやうな事を言て居る所が全く無いではない。しかし其の言は甚だ重んぜられない所に置かれてあつて、從つて其の教が人の心に尊ばれ、人に大いなる慰めを與へ、人の日々の生き方を導いて行たといふことは無い。然るに基督は我々に取ては父であり、我々を子として取り扱つておいでになる神に付て、外の事はもう何も思ふことはいらぬ、唯だ父として事へて行けば善いと教へた。此の觀念を凡ての觀念の土臺にし、其から萬端の事を考へて之を教へられた。それで人間は基督に依て始めて神は我等に取て他意のない父であると云ふことが分り、之を本にして神に事へて行き、

又世の中に立て行く道を考へ出したのである。

それから基督は其の行で神は父だといふことを示された。基督は御自分でも決して自分の我儘をしない、唯だ神の心を行ふのだと仰せられた。基督の行を見ると確に神の行である。然るに其の基督の行は始から終まで愛の行である。前にも言たやうに色々苦勞もし、心配もし、到頭十字架にかゝつたが其は皆な愛から出て來たことである。基督は生命をまで人に與へた。此の行は實に親の行ではないか。基督の心は親心である。然るに此の行は神の心を行つて居るのであるとすれば、神の心は親心より外にはない。神は即ち父である。其を基督が行に示されたのである。

更に又基督は其の容子で神の父なることを示された。基督の一生を見ると、其の態度は如何にも父に對する子の態度である。基督はどこまでも神に依り賴むで居た。又神に從つて居た。人に教へて唯だ天の父を信じ之に依り賴むで行

けと言た基督は、自分では十分神を信じ神に頼み神に委せて居たのである。そこで十字架にかゝつても此の意味の言を洩らし此の態度が鮮に心なき者どもにも見えたので、敵どもは彼は神に依り頼めり神もし彼を愛せば今救ふべしと言て戯弄ひまでした。それから基督が終りまで神の心に從つて居たことは、捕へられる晩にゲッセマネといふ園で、父よもしかなはゞ十字架に懸るといふ此の苦しい目を取り除けて下さい、然し私の心のまゝを願ひませぬ、父よ汝の御心のまゝになし玉へと言て祈つた。生身を有た身の殺される事は矢張辛かつたのであるが、人を救ふには無くてならぬ事で、神の心ならば敢て御心に從ひましやうから、善いやうにして下さいと言ふたのである。凡て斯ういふ態度は、子が慈愛深き父に對する態度である。もし神が父であつて、其の慈愛の顏が判然と基督に見えて居るのでなくては、基督は斯ういふ態度をすることが出來なかつた。大抵の人は物事が順潮に行く時は、神は父なりと信じても居り言ても

居やうが、段々苦しくなつて來ると、神は自分を棄てたとか顧みないとか思ひ出して父でないと考へ出すは愚、神を怨み罵りまで仕出すのである。然るに基督は初の内は勿論、生身を剝かれるやうな目にあつても神に頼み神に從つた。十字架の非常なる苦みを見ても神を父と呼むで已まなかつた。凡て此は孝の至れる子の態度で、基督は之に由て其の對側に父なる神の在るを示されたのである。

此の神を示したのが基督の救の力となつて居る。人は神を父と知らずしては、神を慕ひ、神の中に靈を投げこむで、其で自然の力、肉慾の力から自由になり、平和と愛とに充つるに至るといふとは出來ない。神が判然と見え、其所が生命の海だと分るから、其に飛びこむのである。基督の教と行と態度とに由て、神は父であつて、現に人を愛して居り、人のためには何をも吝まないといふことが分つた。これほどの神の慈愛が分つたなら、如何に罪にかぢり着て居る

剛情な下劣な靈も、涙を流して起つて神に歸り、罪より脱け出で、靈の生命を取りとめやうとする理である。

二、基督を學びて救はる

第二に基督の人格の力が我等を救ふのは、人が其を手本として生きて行くからである。基督ほど學び易い手本はない。我等は少しも自分の生活の有樣を變へずして基督を學むで行かれる。婆羅門教や佛教を嚴密に奉しやうとするには家も棄てねばならぬ。凡て人間の普通の生活をして居ては奉ぜられない。けれども基督を學ふにはそんな事はいらぬ。如何なる人でも基督を學び、基督のやうに生きて行くに差し支へなく、生きて行かば神の子であり。自分も家も國も幸福なのである。基督に於て凡て人の理想があらはれて居る。基督を行ひさへすれば人は可いのである。多くの人は理想といふものは到底我等の行へぬものゝやうに思ふて居るが、基督はちやんと其を行ふて居る。もし基督が世に現はれなかつたならば、敵を愛せよとか、己の如く隣を愛せよとかいふ教は、其は

三、基督の靈の力に由て救はる

唯だ空想であつて、世の中に行へぬものとされ得るであらうが、基督が事實の上に世に生きて、其の德を實行された以上は、其は人の世界で行へぬものではないといふことが分り、そんな德が人の德として世の中で現はれたのだといふことが分る。そこで我等は其は行ひ得るものであるゆゑ行はねばならぬといふ志を起して、之を行ふことになる。そこで神の子を實際に現はし、こゝに靈魂が救はれるのである。

然し以上は我等の外側のことである。其の方の力も大切であるが、其のみには人は救はれぬ。神を示されて神を父だと知ても、乃至基督の手本が事實の上にあるを見ても、人は動かぬ、神の子になりたいと思ふても、いよ〳〵神の子になることは六かしい。茲を第三に基督の靈の力があつて、人の靈を内から變化して神の子として仕舞ふのである。

南洋の島に生えて居る椰子の實が落ちて海に漂ひ、其から他の土地へ流れ着

く。椰子の實は甚だ堅い物で、破つても破れぬ。どんなに叩いても碎けぬ。鋸でやつと挽き割るのであるから、海岸に流れ着いてもころ〳〵と砂の上に轉つて居るに違ひない。波が叩きつけても碎けぬ。獸が蹈でも潰れぬ。所が此の椰子の實が、だん〳〵と春になつて、上からは温い日が照らす、下からは濕氣が廻る、周圍にはそよ〳〵と軟かい風が吹き出す、と其の實の中の心は眠から目を醒まして來る、次第に陽氣に誘はれて頭を上げる。やがてさしもに鐵よりも堅い殼を中から眞二つに破つて、芽が外に突き出して來る。丁度そのやうに人間の靈は頑固にして罪の堅い殼の中に閉ぢ籠もつて居る。親が意見しても益々堅くなつて動かない。師が注意しても愈々心を閉ざして仕舞ふ。然し其所に基督が來ると、其の日の如く溫かな愛、其の濕氣の如く行き屆く同情、其の春風の如く快い精神で、此の頑固な罪の人格の眞中に眠つて居る靈の生命を何時の間にか呼び醒まし、其の頭を上げさせ、到頭其の鐵より堅き殼を破つて外に

出て來させ、非常なる勢を以て生ひ立たせ、蒼々と繁らせ、實を結ばせずには已まぬ。基督の靈は今も昔と變りなく此の活動をして居る。基督に接するときにはどんな靈でも、自然の力、罪の力の囚はれから脫け出て、神の子の非常に大いなる福に入るのである。基督の靈には此の不思議な力が溢れて居る。

之を感化といふのである。感化といふと我國の語では意味が弱い。感ずるといふ字と化するといふ字とでどんなことか分らない。私が今引いた譬でも意味が弱い。然し感化といふ語は、西洋の語では甚だ意味が深い。拉典語、佛蘭西語、英語、獨逸語みな流れ入るといふ字である。即ち立派な人物の德が他の人の心の中に流れ入て、其の人の心を同じ德で充たして仕舞ふことの意味である。

人間同志の間に感化のあるは確な事實である。一の家に一人立派な人があれ

ば、其人の德は家族全體に流れ入て皆な立派な人物になる。一つの村に一人立派な人物があれば其の村が德が高くなる。近江聖人中江藤樹のことなどはすぐ思ひ出される。

此れは實際であつて、誰も疑ふことは出來ぬ。世界には此の事實が充ちて居るのであるが、どうしてこんなになるのであらうか　近頃人の靈の事を研究して居る心靈研究派の學者等の試驗した事の中で、もう全く確だと思はれる事が一つある。其は人の思ふて居る事は他の人の心に這入つて行くと云ふことである。左樣いふ試驗に慣れた二人の女などを用ゐて、空虛な室の中で隅と隅とに坐らせ、甲の方に何か三角とか四角とか旗の畫とかいふやうな簡單な形を書いた紙片をわたす。其を甲は一生懸命に見詰めて其をばかり思ふて居る。其と共に向ふの隅では乙の方の女が靜かにして心を全く空虛にし、甲の思ふて居る事を自分の心に受けやうとする。さうすると乙の方の心には甲の見詰めて居る形があ

り〳〵と浮むで來る。若し試驗者が書板を與へて其を書かすると二十の中の十七八位までは、大抵少しの違ひもなく畫くのである。之を以て見ると人の心と心とは通じ合つて居る。一方の思ふことは口で言はず顏に顯はさないでも見えない所から他方の人の心に入て行くのである。人と人とは丁度水準を試驗する器械を見たやうなものである。色々螺旋形とか喇叭形とか棒形とか異つた形の器を立てゝ其の底をば管で通して置き、其の一に水を入れると形の異つた何の器にも同じ高さに入ると同じい。それで人間の一人が三角や四角の形を思ふてさへ其が他の人の心に移るならば、矢張一人が美くしい思想を持つならば其が他の人の心に這入て美くしい思想となるに違ひない。特に非常に氣高く清く美くしい思想を持た靈であるならば、之に接する他の靈に又此の思想を移し、他の靈をも立派なものにすることは確と思はれる。思想といふものが永く靈の中に留つて居れば、其の思想は其の靈の內容であるから其の人品は高いものと

なつて仕舞ふのである。

感化といふものゝあること、其の力の強いことゝは事實である。前に擧げた心理學風の試驗は或は感化の證明にはならなくなつても、其は證明の途が欠けたゞけであつて、感化の事實は少しも變りないのである。

そこで耶蘇を見るに、彼は萬世無二の大人物である。彼の弟子等は彼を神の獨子なりと叫むだ。我等その榮を見るに眞に神の生み玉へる獨子の榮にして惠と眞にて充てりと言ひ、或は夫れ神の盈滿は悉く耶蘇基督に於て形を成せりと言た。神の諸〳〵の美はしき德は彼に於て生きて用いて居た。されば此の人格よりは無限の感化が凡ての物を壓倒するだけの力を以て流れ出で、其の衝る者を押しつぶして浸して居ることは明である。

基督の弟子等は此の感化に觸れ、之に押し倒され、之に徹底された者共である。ペテロは如何、ヨハネは如何、パウロは如何。彼等は基督に接しなかつた

前は、矢張普通の猶太人であつた。彼等の如き青年を同國人の中から選むだら決して材料の乏しいに困まぬのである。彼等は神を信じては居たが、神を父なりと信じ、只管その慈愛に縋り、其の感化を受ける心がなかつた。神の心を以て人を愛するといふこともなかつた。然るに基督に接して彼等の內には神に對する子の信念が湧き出た。人を愛する眞の愛が芽ばえた。無かつたものが出來たのである。萬事は其で一變した。彼等は別人になつた。新約の人になつた。神の子供になつた。此れは何に由て生じたか。基督の中に充ちて居た精神そのものである。基督の精神が彼等に流れ入つたのである。彼等は頑であつた。然し無限の壓力ある耶蘇の感化は、彼等の心の戸を押しあけて中に入たのである。

所が基督は唯だ其の時代の弟子等を斯くして救ふたのみではない。既にパウロさへ耶蘇の此世を去た後に現はれた人物である。基督はパウロを動かして之

を感化し、之を大人物としたこと、其の世に在る内ペテロを感化しヨハネを感化したと少しも變りがなかつた。其から後三十年五十年百年といふ間に、幾多の基督の徒が出來て、皆な其は同じやうに基督の感化を受けて一變して罪ある者から神の子供となつた。其中には千古の大人物も雲の如く多い。基督の感化は時代を重ね、區域を廣くして益々強くなつた。池の中に石を投げこめば、初の内は鮮な波紋を畫くがやがては其が弱くなつて消えるけれど、基督の感化の波は初も後も變らず、區域が廣くなつて却つて盛に用をして居る。爾來二千年いつも同じである。今日尚同じである。耶蘇の感化は今日も使徒時代と同じく、多くの罪ある者を改めて神の子供とし、多くの善人を更に最も力強き聖者にして居る。

之を以ても明なるが如く、基督は今尚生きて居るのである。此の表面の物の世界の裏の靈の世界には、基督今尚儼然として在て今日の人と交渉し、之を

感化して居るのである。もしさもなければ二千年前の人物の殘した感化が、さう何時までも盛に用をするものではない。どこにもそんな例はない。基督教のみ人を生れ更らせることが出來て居るものは、基督の靈が茲に在るからである。天地は移り變り、人は生じては滅したが、基督の人格は二千年同じく活きて用をして居る。未來永く然るべきものである。

そこで耶蘇基督を信仰し、基督の靈の我と共に在ることを信じ、基督の靈を我等の心に受けるならば、我等は基督の人格から其の聖德と愛とを注ぎ入れられ、我等の靈の中に基督の靈の中の德が入て仕舞ふのである。其を聖書には新生命と稱してある。此の新生命は初は縷のやうであるが、然し段々と其が人の靈の中でひろがり出し、終に其の人の中に一杯になつて仕舞ふ。丁度寛の水が初の内は桶の中に僅ばかり入て居るが、次第に加はつて終に桶から溢れ出るやうなもの。或は泥水の充ちて居る桶に筧を引くと、初は清水が入ても分らない

位であるが、次第に泥水は押し出されて、終には澄み透つた水となつて仕舞ふやうに、基督を信ずるときには、次第に基督の心が我等の中に流し入て、凡て汚れた内容は押し出され、清い靈にて一杯に充たされるやうになるのである。其が即ち新人であつて、また神の子である。何となれば基督の心は純然たる神の子であるから、其心が我等の中に充つれば我等は神の子である。斯くて我等は救はれたのである。

我等は現に此の救を經驗して居る。我等の靈は尙汚れで充ちて居り、尙色々の罪が徘徊して居る。眞に恥かしいものであるが、然し我等は確に奮い自分ではない。舊い自分は神が分らなかつた。全く暗の中に孤立して居たやうなものだ。所が基督に接して我が對側に神の在ることが知れた。此れは非常に大いなる發見である。自分の前の天地は之と共に一新して仕舞つた。人生は全く意味を變して仕舞つた。神あると無いとでは生と死が分れる。其から自分は基督に

接して神の愛も分つた。基督の敎を聽き、基督の心を與へられて見ると、成程今までは何心なくすぎて居た事も神の惠である。今迄禍と思ふて居たことも神の惠である。基督の心が分つて來、基督の愛が分つて來ると、神の惠は親の愛よりも溫いことを感ずるやうになつた。此れ又我に取ての大變化である。斯くの如くして人生に望が出來た、喜が出來た、勇氣が出來た、義務の感が強くなつた。それから基督に接して自分の理想も分つた。以前は自分は如何になれば可いか、如何にすれば可いか〻分らなかつた。然し自分の神の子供だといふことが分つた。神に愛せられて居る、神に一致せねばならぬ、神の心を行はねばならぬといふことが思はれ出した。此の變化は大いなるものである。自分の生活の方針も定り、自覺も出來、大いなる心を持て居られるのである。其から基督を信じて微なから人を愛する心も出來た。以前とても全くないではなかつたが、どうも根が淺く、又淸くなかつたやうだ。純然自分の利を求めずし

て、唯だ人を幸ひにしたい、自分に敵するものでも、願はくは善人になれかしと思ふやうな心は、基督に接してから出來たのである。それから安心といふもの、平和といふやうなものも基督に接してからこそ感じられるのである。

我等の新生命はたつた此れだけかも知れぬ。然し之を無いに比べたら如何。全く天地も雷ならぬ差である。然るに以前は其がなかつたのである。其が出來た。基督の生命は確に自分の中に這入て居る。基督が無かつたらこんなことは全く有り得ぬのである。我等は基督に由て神の子とせられた。今は小さいが、段々基督の心を注がれて、後には此の新しい生命が一杯になること丶信ずる。基督は我等の救主である。

基督に由て神の子とせられたものは永生を與へられたと稱せられる。即ち其の生命は基督の生命の這入たものであつて、此れは限りなく續くといふのである。然し唯だ限りなく續くといふばかりでは左程尊いこともない。如何なる人

の生命も死と共に消滅するのではないから、みな續くのである。然しながら前に言たやうに罪の結果を受けて、善の力が萎微し、神より離れ、不滿と苦みと寂寥とに壓迫され、地獄の火で燒かるゝやうな風になつて何時までも生きるのは、寧ろ死よりも辛いのである。基督に由て得た永生とは、神の子の品性を以て生き、神に賴つて安心し、神より愛せられて慰められ、神より育てられて發達し、愛の心を以て始終喜びに溢れて居る生命である。此の生命は信仰と同時に始まる。然し其は芽のやうで尙小さいけれども、段々信仰の加はるに從つて成長し、此世でも其が非常に大きくなつて、其の生命の咲かする花が美はしく咲き出るに至る。信仰と望と愛といふも其れ。パウロは之を仁愛、喜樂、慈悲、良善、溫柔、撙節、平和、忍耐などゝいつて居る。基督信者の胸の中には永遠の生命が湛へて居るのである。其が此世の齡を終へ、いよ〳〵肉の衣を脫ぎ棄つる時になるなら、益々大いなる勢を以て發展し、全く此世の力から脫

出して靈界にばかり入て仕舞ふ後には、圓滿な姿になつて、其の幸福を殘る方なく享くることが出來るのである。我等は今日基督を信仰して、此の未來の廣い大なる永生、即ち末廣の永生の、其の頭の所に蹈み入たのである。信仰を保ちさへすれば、直ちに此の生命は擴がつて、海よりも廣く充ち滿つるに至るのである。

四、基督を信ずるの要

四　基督を信ずるの要

さういふ風に人は基督に由て神の子とせられ、諸の禍より救はれるのであるが、然らば天下萬人一樣に救はれるか。此から數萬年もたつたら、人は誰も彼もみな救はれて居るかも知れぬ。神は父であるから一人の亡びるをも欲せず、必ずや萬人擧つて神の子供になり、幸を受けるやうに、此の世界を導くであらうとは思はれる。然し其は唯だ推測であつて、果してさうなるかどうかは

分らぬ。唯だ我等の目に見える限りの間のことを言ふなら、罪を犯して尙惡をなしつゝある者は、到底神と一體となることは出來る筈がない。神は聖なる靈であるから、汚と不義を自分に包み入れる筈はない。そこで罪ある者は神の外に立て、悲み苦む不幸を見なければならず、又神の心を行へないから、諸の惡を自ら造つて其の結果に惱まされねばならぬ。それで如何なる者も皆な救はれるとは思はれぬ。救には條件がある。

其の條件は何であらうか。前に言たやうに、道德の細かい節々を一々果さうとしたり、又は儀式律法を缺けなく守らうとしたり、難行苦行したりして、其で救はれやうとした者も多いが、前に言たやうに、其は中々出來るものでもなし、其では救はれもせぬのである。基督教に於ては唯だ基督を信じさへすれば可い。其に由て救はれて居るのである。

耶蘇基督の感化は此の世界の中に漲つて居る。靈界は基督より出づる感化の

基督の感化の力は強し

波が高く又細かく打て居り震ふて居る。基督の感化の波は如何なる高い所にも打ち揚げ、如何なる小さい所にも打ちこむで居る。世界の人は基督を知らずして、而して基督の感化の波に接し、其に由て心を洗はれ、美くしくせられ、善をなして居ることが少くない。此れは實に幸福なことである。人が善い感化の中に在るのは樂いものである。子供が善き父母の家に育ち、目から耳から善きことを見聞きし、心の中に父母の德の流れ入て居るのは尊い。其と同じく基督の感化の中に在るのは幸福である。神は人に向つて此の感化を注ぎかけて居るのである。此れは抵抗すべからざる程力が強いに相違ない。人が罪に向いて居る心を飜へし、神に向ひ、神に從はうとするに至るは、基督の感化が次第に流れ入て、人の心の平均が違つて來るからである。心の天秤の一方に罪ばかりが山のやうに載つて居て、盤は地面に落ちついて仕舞つて居るのを、基督の德が他方の盤の中に段々加へて載せられて行くので、到頭天秤は刎ね返つて、今度

感化のみにては足らず

は基督の德の載つた方が重く、大盤石のやうに地に着いて、もう動かなくなるのである。

が然しながら斯うなるには實は基督から來る感化ばかりでは出來ぬのである。非常に豊な感化の中に埋もつて居ても、人は少しも移らぬことがある。立派な聖人の傍に居て、友たちは皆な其の感化を受けたのに一人變らぬものがある。釋迦の弟子に提婆があつた。耶蘇の十二使徒中にもイスカリオテのユダが出た。これは何故か。彼等は其の感化の中に居ても、自分で心を閉ぢて仕舞つて、其の感化を受けぬからである。人は自ら心を閉づることが出來る。其を閉ぢたら如何なる強力の感化ももう入らぬ。そこが人の心の不思議な所の一つ。そこで感化がいくらあつても、其ばかりでは人は善くならぬ。

人の志が大切

人の善くなるのは外にそんな美しく力強い感化が必ずあると共に内から自分で心を開くに由るのである。内から自分が心を開いて感化を受けるならば、其

の感化は非常に大なる勢を以て自分の靈に流れ入る。横須賀に出來た新船渠の水門を開ける時、大海の水がうなつて入ると同じやうなもの。それで人は自分で心を開くことが大切である。此れが人の志である。人の志は其人自身に現はれるものであつて、何者も之を搔き消すことは出來ぬ。此の志を立てゝ感化を受けるならば感化は坌入し來り、此の志を立てゝ、感化を拒むならば感化は鐵壁に遭たよりも美事に押し返へされる。志といふは人の心の奥の奥、たゞ一點針の尖の如きものであるが、其が自分の右に行き左に行き、全く善くなり惡くなるのを定めるものである。

そこで、其の志を立てゝ基督を慕ひ、其の感化を受け入れる。是が信仰である。信仰といふものは決して唯だ神が在ると思ひ、神は惠み深いと思ひ、又基督は神の子であると思ふばかりではない。さう思ふばかりでは力はない。是まで多くの基督教の牧師たちは人に斯う思はせるばかりを勉め、其で澤山と思ふ

て居た。成程其で安心を得る位の事はあらうし、間接には多少は品性も善くなりもしやうが、其は弱い話である。信仰は思ふばかりでなく、自分の心を引くりかへし、神に向け、基督を仰ぎ、其の漲り溢るゝ感化を受け入れ、基督と同じ心となつて仕舞ふことである。其で自分が變つて仕舞ふのである。

其の信仰を以て基督を信ずるのである。さすれば基督の感化は滿潮の大海に面した水門を開いた時のやうに入て自分を新にし神の子にする。信仰は我が志ゆるゝ譬へれば電燈の扭手の辨を見たやうなもの、辨は眞に小さい、其を彼方に向け此方に向けるのは、唯だ指頭で扭手を輕く扭れば可い。所が此の辨が左に向いて居る間は、電氣は電球の中には通ぜぬ。其を一たび右にねぢるならば其に由て電線に來て居る電氣は忽ち球の中に入て來て、炭素線は熱して明るい光を放つ。信仰は唯だ心の一點の向け方であるが、之を起さずにあれば、自分は冷たく暗く、自分の周圍にも光を放たぬ。然し一たび其の心の小さき志を

基督に向けんか、恰も桂川の發電所にて何十萬電力を持て居り、赤く塗つた高壓電氣送電線を通じ、人觸るれば人を倒し、馬ふるれば馬を倒す勢で流れて來て、市内の變壓所に入り、架空線に分けられて居る電氣が、瞬く間に電球の中に流れこむで、淋しく暗く冷たかつた所を、明るくし樂しくするやうに、無限なる神の中に充ち、基督の中に湛へ、始終人に非常な壓力を以て注ぎかゝつて居る正義の德愛の德は、瞬く間に我等の心に流れ入り、我等の暗かつた心を照らし、淋しかつた心を賑はせ、五燭光は五燭光として、十燭光は十燭光として、千萬燭光は千萬燭光として、光を周圍に放たせ、世の中を幸にするのである。

基督は救主

基督は我等に神を最も明白に敎へ、其の父なることを示した者である。また基督は其の人格に於て神の德を生きて現はし、生きたる神として世の中で活動したものである。其と共に基督は無限の感化を發して、先づ十二使徒を救ふて

神の子となし、其より代々信ずるものを神の子として居る。彼は今日でも生きて用いて居る。基督の感化は唯だ遠い昔に在た人の殘した印象ではない。其ならば今日かくの如く最惡人を生れ變らせて聖者とし、凡て信ずるものに新らしい生命を與へることは出來ぬ。然るに基督の感化が今は却つて昔より盛に用いて、其の德が今の人の靈の中にずん〳〵流れ入つて居るのは、彼が今尙生きて目に見えぬ靈界で作用して居るからである。彼の人格が其所に我等に咫尺して在るからである。彼は其の力で我等を救ふ。されば基督は我等の救主である。我等の生命の親である。否我等の生命である。基督なかりせば我等の新しい人格はない。我等の人格は基督から生命を受けて靈の花を咲かせて居るのである。

人の理想を發揮す

基督を救主として信じ、其の神の子の姿を仰ぎ、只管その人格の力を祈り求むるならば、我等の靈には其の靈を與へられて我等は玆に全く救はれるのである。されば基督は人の實際を救ふて、人を理想の姿に入らせ、人をして其の在

るべき樣に在らせ、幸福此上なからしむるものである。人は基督を信じて、人の人たる面目を發揮し、幸福極りなきに至るのである。

第五章　新生命の實現

一　生命の發現

一、生命の發現

生命といふはどんな物か、如何なる學者にも其はまだ分らない。然し生命は用をして居る。其は誰にでも見える。我等が生命の在るのを知るは、其の用をして居るので知り、其の生命はどんな生命であるかを知るのは、其の用き工合で知るのである。其等の用は即ち生命の現はれて動いて居るものであつて、生命が自らを持ち出して外に顯はして居るのである。

基督は新生命を與ふ

基督を信ずれば基督の靈の中にある正義と愛とを一杯に與へられ新らしい生命を得るといふことも、其はどういふ風になつて得たのであるか目に見えるのではない。けれども基督を信ずると同時に、信者の靈は今までにない新しい用

をし出す。即ち觀念が變り、志が變り、神を慕ひ、正義を愛し、安心を得、平和を得、又人を愛し出す。斯ういふ用をするのは舊い靈には無かつたことであるから、此の新しい用の本には新しい生命が既に入つて居るのに相違ない。新しい生命が既に入つたから、其が現はれて用をするのが、そんな立派な思想や行であると言はざるを得ぬ。

兎に角基督を信ずる者は、其の靈の中に新しい生命を注ぎ入れられる、其の生命が即ち神の子の人格を成して居るのである。そこで既に生命があれば、花が咲き實が生る、人格があれば其の生活がある。其の花や實は内にある生命を現はしたものであり、其の生活は内に在る人格を實現したものである。基督信者は神の子たる人格を持ち出だして基督教生活を起す、基督教生活は神の子の人格の現はれて行はれたものである。

そこで基督の徒は、行住座臥神の子たる自己を實現しなくてはならぬ。神の

子を實現するのは神を實現するのである。何となれば子といふは父と一體となつたものゝ意味である。神の子といふは神の意を意とし、神と共に浮き沈み、神と共に上り下りするものゝ謂である。だから神の子たる自分の生命を持ち出して一生に用かするときには、其は神を持ち出して用かせるに外ならぬのである。我等の行は神が行つて居ることであり、我等の思想は神が思想して居ることである。これが基督の徒の生活の理想である。基督の徒は斯うならなければならぬのである。

此で基督に救はれた甲斐がある。此れで基督の救が我等の生活に用があるのである。此れが基督教なのである。若し基督に救はれたといふことは、我等の日常の生活とは別に關係もなく、基督を信じたからとて、其を日々の事に行つて行く途もなく、途はあつても大變稀なやうなことでゞもあらば、基督教は眞に偏つたもので、我等はそんな自分の身の上の一部分にしか關係のないことを

守つて行く暇がないのである。けれども基督は新しい生命を與へる。生命だから一擧手一投足も其の現はれて出たものなのである。我等の生活全體が基督敎なのである。

我等の生活全體が基督敎であるが、然し我等は日々千差萬別の事を考へたり行つたりして、生活の變化は無限である。其の何れの點が、基督敎の最も中心の點、最も大切な點の現はれて用いて居るものであるか。又我等は如何なることをすれば、最も基督敎の中心を現はし、神の子の面目を發揮し、新生命を實現したことになるのであるか。之を考へて、之を大いに發揮實現し、我等はいよ〳〵神の子の姿を圓滿にし、我等の家や國や社會に於て、神の子の振舞をなし、之を神の國とし、幸に充たせねばならぬ。

さて其の神の子の生活の最も大切な點は何であらうか。其は直接神に關係した方面と、直接人に關係した方面と自分自身の精神の狀態とである。此の三點

に於て神の子たる人格を用かせるのが最も大切なことであつて、此の三樣の生活に於て神の子供の人格が最もよく、殆ど其の全體を發揮するのである。

二　神に對する生活

二、神に對する生活

救はれて神の子供となつた者は、神を父として慕ひ、心を全く神に向け、之を信じ、之に委せ、其の無限の感化を仰ぎ、其の心を受け、其の心を此世に行ひ、全く神と一體となつて生きるのであるが、此の神と一體たる神の子供が、父なる神に對する場合、其の靈が志して起す所の活動は何であらうか。基督の徒は神に對しては信賴の生活、服從の生活、献身の生活をするのであるが、其は一方には神の子供たる面目を益々整へることであると共に、自分の中にある神の生命をいよ〳〵生きて用かせることである。神の靈を己れの靈の中に流し入れられて、新らしき人となつて居ないならばかういふ活動はない。此の活動

は神の生命の活動で、即ち神の生命が現はれて用くのである。そこで此は大切なことであり自然のことであり大に努むべきことである。然らば其はどんなものであらうか。

一、祈禱

一は祈禱である。抑も祈禱といふは人が神を念ふとき其の心の神に向つて動き出る其の活動を指して言たことである。祈禱と言ふ語の原の意味は其よりも狹いが、實は此の廣い意味で用ゐるのである。誰でも自分は茲に獨で立て居るのではない、自分の對側には神がちやんと立て居ると思ふたら、自分の心の底から、何かの思が自づから湧き出て、其の神の方に動いて行かざるを得ぬ。其が祈りである。だから苟も人間以上に神のあるを思ふ者は、どんな野蠻人でも祈りをする。世界の宗教は千差萬別であり、其の形も無數であるが、祈はどの宗教にも共通して居る。祈りがさういふものであるとしたら、其の神に對する時、動く心といふはどんなものであらうか。基督の徒は父なる神を信ずる。神は

基督に於て此の世界に最も明に最も強く現はれて用き、基督は今生きて用をして居ると信じて居る。そこで基督の徒も、此の神に對して在ることを意識するときには、色々の心が起る。

甲は讃美である。此の天地に我れ一人在るに非ず、神があると思ひ、神は天地を斯く宏大に斯く美はしく造り玉へりと思ひ、神の力、神の智慧、神の德は此の大天地の全體より小さき物までも滿ち充ちて居ることなどを思ふときには我等は覺えず、あゝ神よ汝の智慧と力は大なるかな、汝の惠は妙なるかなと讃嘆せざるを得ぬ。此の讃美の心が祈である。此れは自然ではあるまいか。人が此の讃美の心を動かすとき、神は即ち人に由て自らの宏大を意識したとも言はれる。又神より造られた人の靈は、神の偉大を反響して、其が神に反つたのである。且又人の靈は此の讃美に由て益々神の子の面目を發揮するのである。動物は唯だ神の造つた天地に生を托するのみである。彼等は神が念へぬ。彼等よ

りは神に反つて行く思想はない。然るに人は靈を以て神の大を認め神を讃美することが出來る。讃美の盛なる人ほど神がわかり天地が分つて居るのである。讃美するほど尙分つて行くのである。友人同志でも立派な人でなくては立派な友の德は分らぬ。讃美は出來ぬ。讃美することの出來ぬ靈は實に卑しい靈である。何物をも誹り貶すほど厭ふべきはない。死は汝を讃美せずとあるがまさに其の通り。讃美は自然であつて祝福である。

乙は感謝である。神が在て、世界の萬端に用き、自分の萬端を導いて居ることを思ふときには、其の攝理の慈愛なのに感謝の心が起らずには居られぬ。三度の飯を食つても、我れ生を此の地に托す、運命すべて我が心のまゝになるものに非ず、然るに恙なくして飢うることもなく、日毎の糧を與へられると思へば、あゝ有り難いと思はざるを得ぬ。萬事にさうである。其心が感謝である。此れまた自然であつて、誰にでもあることである。信仰の月日が重なれば其が

益々多くなつて來る。幸福の時には勿論感謝する心が起る。然し不幸の時にも其に由て心を啓かれ、一段高い所に上るやうになるので、また之を感謝する。此の感謝は我等が神の子供たる所を發揮したものであり、且つ神の生命を現はして用かせたものである。神の靈は柔い。恩に對しては感謝に溢るゝ。其の神の靈我が內に充つる時、感謝の心湧かざるを得ぬ。又此の感謝に由て我等は神に歸つたのである。而して此の感謝は我等の神の子たる品性を耕す上にも大いに必要である。冥府は汝に感謝せずと舊約聖書にあるが、確に感謝のない心は冥府の心である。其には祝福はない。人間同志でも感謝を知らぬ靈は、唯だ貪り唯だ不滿であつて、全く傍にも寄りつけぬのである。神に感謝して美はしい心のものとなる。又他人に對しても感謝の心を一層多く持つやうになり、世を樂しくし、美はしくすることが出來る。

丙は懺悔である。神の前に立て居ることを感じ、神の惠が分り、神の聖なる

祈願

徳の分つた時には、自分は光の中に立た暗い影のやうな心地がする。我は神の子と稱へらるゝものであるのに、我が神の子の姿は太くも潰えて居る。我は神の心に反いて居る。神の恩を忘れて居る。神の悲むことをして居る。斯う思ふて神よ我が罪を赦し玉へと叫び、二度とそんな罪をば犯すまじといふ心となる。此れまた神が我等の中に用いて、凡て神の性格に反いたものを排斥し、性格に合たもので充ちやうとする努力である。神の子供の靈には自づから此の活動がある筈である。之あるが故に人は神の子として益々進歩するのである。悔いなきの心は殘忍の心であつて、何十年たつても一寸も進まぬ心である。

丁は祈願である。我等人間の力は限りがある。狹い區域だけでは能が出來るが、其はすぐ界に行き詰まつて、其から先は何も出來ぬ。然るに我等は多くのこと大いなることを要するものである。我等の力で出來るだけのことをして居ては迚も進歩は出來ぬし、生きてさへ居られぬ。そこに天地には我等人間があ

るばかりでなく、人間の以上に神がある、天地を造り之を主宰し、能はざる所なくして、そして其は我等の幸福を計つて居る父だと信ずるのであるから、信ずると同時に神に頼り、神より善いやうに計つていたゞき、神の力で我等の要するものを充たしてもらはうとする心が切に湧き起る。此も自然である。祈願のないものなら必ず信仰のないものである。而して此の祈願は必ず應顯がある に相違ない。神は知があり情がある。神は活動して居る。唯だ器械のやうに動いて居るのでなく、自分の心に由て動いて居る。されば人の要するものを充たせてやらうために活動する理のないことはない。基督は其を人間同志のことに譬へた。夜中に麵包を借りに來た友があると、初は中々起きて貸す氣がないが再三乞ふと貸してやるではないか、不義なる裁判官も、貧い寡が惡人から苦められて居るのを訴へて來た時、何も自分の利益にならぬから訴訟を取り上げないが、餘り度々來るので終に取り上げてやるではないか。天地は器械の法則で

動いて居らぬ。父なる神がある。其の溫い慈愛の心に人が訴へる時、之に應へぬ理はないと敎へた。祈願は必ず應顯がある。現に基督の徒には其を經驗する者が頗る多い。否誰でも其を常に經驗する。もし我等の欲する通りに祈願がかなはなくとも、應顯がなかつたとは言へぬ。我等の祈願通りに物が行たら大變である。死ぬるものなどは無くなる譯。それに我等は何も深いことの分らぬものだから、隨分無茶な祈願をするのである。其で神は我等に取りて最も善いやうに其を應へるは言ふまでもない。我等には祈願の聽かれなかつたやうに見えること、却つて禍が與へられたやうに感ぜられること、其が却つて我等の眞の幸で、神が實に祈願に應へたのであることも甚だ多いと思はれる。もし又全く祈願には應顯が無くとも可い。祈願は自然であるから爲すべきである。其のみならず祈願は我等に取りて大切である。淸いこと高いことは祈願の精神を以てせねばならぬ。名工は祈つて刀を鍛つたり、像を刻むだりしたではないか。

日常の事でも其心があらば如何程事が立派なか知れぬ。其の爲す所には力が强い。もし祈願がなくて、何事も自分がすると思つたら、決して大事は出來ぬ。人の力は限りがある。だから初から自分の手の屆くだけのことしか目論まぬ。我が手は近い所にしか屆かぬが、其から先は神よ汝が手を伸ばして成就し玉へと祈つてかゝつてこそ、高いこと大いなることも出來、人の志が大きいのである。品性の修養でもまた同じで、祈願の心のある者が高くなるのである。神に祈願することは最も大切である。

其他にも祈の中に入るべきことはあるかも知れぬが、こんな心の活動が祈禱として代表して差支がない。

二、靜思

二に神の子供の生活は靜思である。靜に思を凝らして神を念じ、基督を受ける用意は甚だ大切である。神の子供は自然に神を思ふのである。他鄕に出た少年は、机に凭れたまゝ、披いた書物も見れども見えず、凡ての思ひをおしのけ

て、只管父母を思ふて思ひ耽るが常である。神の子供も神を思ひ耽る。サミュエル・ラザーフォルドが宗教のために獄に入れられ、獄中で基督を念じて、獄舍の壁の石が一つ〳〵寶玉の如く輝くまでに至つたといふ話などは其の手本である。其他かくの如き多くの立派な信者のやうに、基督を念ずること、神を思ふことが切であらば、神の子の面目は益々あらはれ、自分の幸は加はるのである。此の時に於て神の共に在すことも最も強く感ぜられ、基督の靈の感化も最も多く流れ入る。人はざわ〳〵してばかり居てはならぬ。神の子供は必ず此の靜思をする。此の靜思をすれば神の子の姿がいよいよ熟する。是なくしては靈が唯だ浮いた物に建てられて居るやうである。靜思して靈が神まで屆き、もう如何なる誘惑も困難も、吹き飛ばし、洗ひ流すことの出來ぬものとなるのである。病氣をするとき基督の徒が一段の進歩をするのは此故である。病氣ならば否でも靜にして居る。そこで自然神を思ふ、基督を念ずる。故に進歩がある。

私は何時でも病氣の人には、もう何も世の中のことを思はず、自分は病氣だといふことも思はず、自分自身さへ思はないで、只管神を念じ基督を思へ、さすれば必ず病氣も快くなる、其の靈魂に至つては最も密に神に交り、神の感化を受けると勸めるのである。然し是は病氣の時ばかりに左樣であるやうでは困る。健な時にも其の用意がなくてはならぬ。凡て靜かなる心でなくては感化の波の印象は着かぬものである。天文臺の天體寫眞機は極めて靜かなことを要する。車の軋り、人の步み、其他に由て地が動いて、其の波が機械に感ぜられては、天體の微妙な變化は寫眞に映らぬ。そこで其等の動搖の感ぜられぬやうに、深く土地を堀つて空堀を作つたり、建築の土臺は固めた上に更に羊の毛の厚いクションを敷たりしてあるさうである。人の心も色々此世の動搖に弄ばれ、あらゆる感化の中に浸されて居ては、神の惠み、基督の感化を受け難いのである。矢張靜にして他の物より耳を閉ぢ、目を閉ぢ、唯だ天に向つて自己を開く必要

がある。さうすれば天の生命は潮の如く押し入るのである。基督の姿はいよいよ鮮に見えるのである。茲に於て神と一つとなり、神の子の面目は現はれる。

三に聖書を讀み、之を研究し、之を思ふことに由て、神の子の姿は益々圓滿になり、神の子の面目は現はれて來る。前に言ふが如く、祈禱といふこと、靜思といふことは極めて大切なことであるが、然し唯だ祈り唯だ靜思するといふのでは人の心の體操をするのみで一向品性が美はしくならず、神の子の姿を發揮せぬのである。何となれば其の目的になつて居る神がどういふ神かはつきりして居らず、其の念ふて居る基督がどういふ基督か分らないのであるから、唯だ空に神を思ひ基督を思ふが故である。此れが多くの神祕者といふもの丶陷り易い過で、又かの聖靈を受けよとか潔めを受けよとか盛に呼ばゝる基督敎徒の陷つて居る所である。彼等は成程神には祈る、基督をば念ずる、聖靈には充たされたと思ふ。然しながら彼等は神の內容、基督の內容、聖靈の內容を知らず

又詳しく考へぬ。そこで內容のない神に接し基督に接し聖靈に接するのだから、たとひ接したつもりでも、唯だ物怪に取りつかれたやうな心持のみで、甚だしきは身體が激しく震へたり、痙攣したり、卓子や椅子を投げたりするやうなことになるばかりで、神の德、基督の德が實際その心に流れ入らぬのである。若し眞に神を受け基督を受けたのならば、其の德が具はる筈であらう。されば神と基督とは如何に用き玉ふか、其の生命は實際世界には如何になつて花を咲かすか、其を知り、其の用きに接し、其を受けねばならぬ。其の用きの現はれて居るのが聖書である。

聖書といつても大切なのは新約全書である。新約全書はもと二十七卷の別々の文書であつたのを、紀元三百年時代には既にあれだけが合本して聖書とされて居たものである。初に別々の基督一代記が四つあり、次に弟子等の傳道した記錄が一つあり、其からパウロの手紙があり、其から他の弟子等の手紙があり、

最後に世の末の事を想像して書いた未來記がある。此等の文書は何れも出所の確なもので、羅馬書、哥林多前書、同後書、加拉太書などいふパウロの手紙の如きは、どうしてもパウロの書いたものであるといふことは如何なる學者も認めて居る。パウロは基督の弟子で紀元六十七年頃敎のためローマでネロ皇帝の下に首を斬られた大人物である。それから初の三つの基督一代記、即ち馬太傳、馬可傳、路加傳は著者は誰であるにせよ、紀元八十年頃までには出來て居たものに相違ないこと、此れ又學者の齊しく認める所である。使徒行傳また同じく確だとせられる。約翰傳も百年前には必ず出來て居たものでなくてはならぬ證據がある。

が新約全書を讀むのは、其中に生きて現はれて居る耶蘇基督の人格を讀むのである、其の精神に接するのである。聖書には基督の敎がある、基督の行がある。其がその有たまゝ記されてある。そこで其の敎その行をなした基督の人格

がそこに生きて居る。基督の人格が發して基督の一代の敎となり行となつた。基督の敎や行は人格を顯はして居る。神の子の人格は發すればどんな花を咲かすか〻此に現はれて居る。基督のやうな花を咲かすれば其下に神の子の生命が既に流れて居ることも分る。聖書を讀むのは此の耶蘇の人格を讀むのである。讀むで思ひ、思ふて耽るならば、やがて此の聖書の記事に顯はれて居る大なる精神と一致するやうになる。我等が普通の書物を讀で居ても、其が重なるに從つて著者と同じ心となり著者の物を思ふやうに思ひ出すではないか。聖書を讀むならば基督の精神と一致することが出來、基督の思ふやうに思ひ、基督の行ふやうに行ひ出す。其の時は神の子である。

弟子等の手紙や行の記事やを讀むでも又殆ど同じい。其に由て弟子等自身の人格に接するのであるが、其の人格は基督に由て生れ更らせられたものであり、其の人格からは基督が流れ出て居る。彼等が直接に基督に對する信仰を言ひ顯

はして居る所は勿論基督を顯はして居るが、凡て自分の思想として言ふ所、みな基督の靈が彼等より流れ出て居る。

そこで新約聖書を讀むのは基督に接するのである。又次第に基督と一心同體になる所以である。さうして斯くして見える基督の人格に於て、我等は神を見るのである。即ち基督の人格を見れば、此れは神の姿であつて、基督の行は神の行であるし、基督の行や思想の花は神の生命のみ獨り咲かし得べき者であるから、基督の中に神の生命の充ちて用いて居るのを認め、茲に於て基督と一つとなるは神と一つとなるのであつて、神の子であるのである。

新約全書の中の不思議の事などは、些も氣にせぬが可い。基督は處女から生れたとか、又死人を甦らせたとか、海の上を歩むだとか、殺されたけれど甦つたとかいふやうなことは、それはどうでも可いではないか。私はそんな事を書いた所を信ぜられぬとは思はぬ。又そんな事はあるまじき事とも思はぬ。隨分

理外の理といふことは何所にもあるし、特に基督のやうな神の子と言はれる大人格が不思議にも曾て此世に實際上存在したのである、夢のやうな事が事實であつたのだから、其より以下の不思議がなかつたとは言へぬ。死で甦つたといふことの如きは、歴史から考へれば確に信ずべき理由もあるのである。然しそんなことは何れにしても可い。基督の人格は確に無二に美はしくして神を顯はして居り神の子であり、而して確に今尙生きて用き我等を救ふ者である。是だけが事實ならば他は問ふを要せぬ。新約全書は此所を見るべきものである。

新約全書の外に基督信徒は舊約全書をも聖書として居る。舊約は三十九卷あつて基督より以前の猶太教の聖書である。此れ又宗教の大天才どもの書いたもの編むだものであるから、神をよく示し、神の心を心として顯はし、之を讀むときには神の精神に接するのである。猶太の天才どもは最もよく神を知り、最も多く神の用に動かされたものであるから、其の遺した舊約全書は萬代に人を

神に接せしめる力がある。

けれども舊約は神の示したものであつて一字一句も誤りがないなどいふ信仰は迷信である。いくら舊約に神が天地を六日に造つたとあればとて、文字通り信ぜねばならぬ筈はない。其他の所でも同じである。我等は文字を信ずるのではない。其中に在る精神に合するのである。舊約の信仰と一致するのである。

加之、舊約の思想はまだ幼い。神も或所では人の形をもつたやうになつて居り、他の所では嫉妬強くなつて居たり、太い復讐をするやうになつて居る。從つて舊約の道德觀念はまだ大變低い。基督は其を破つて、全く高い所に出で、高い所から神を見、人を見、之を敎へ、自ら行ひをし玉ふたのである。馬太傳五章の中などには此事を言てある。

そこで基督の徒は舊約に囚へられては可けぬ。舊約の目で新約を見てはならぬ。舊約は助けにはなるが師ではない、救主ではない。救は新約にあるのである。新約で思想を造り、主義を造り、人格を造り、そして舊約を助にすれば可いのである。舊約を引て基督敎を說明したりするのは危い。人が舊約を取て基督敎を非難したとて其の責に任ずることはいらぬ。否々新約で自分の思想人格の形が成るまでは、或は舊約は讀まぬ方が可いかも知れぬ。

兎に角聖書を讀み、其に付て究め、其に付て思ふのは、基督の徒の生活の重大なる一部である。基督の徒たるものは玆に自分の大いなる樂を感ずるであらうし、また斯くすることに由て、聖書の底に生きて居る大精神と一致合體するのである。

四、直接の奉仕

四には直接に神のため活動をすることである。禮拜といふこともしなければならぬ。また神の國のためになることならば大いに努めなければならぬ。もし基督を信ずるために迫害を受けるやうなことでもあらば、喜むで之を受け、其中に基督らしく處して行かねばならぬ。昔は殉敎の死を遂げた人も少くない。

これ直接に神に事ふる途の一である。それから基督の道を奉ずる者の難を救ふことも、また神に事ふる途である。其から神の道を弘むるために、力を盡し金を費すことも、此れまた神に事ふる途である。一體に教會が外には盛になるため、内には其の清くなるため、勞することもまた神に事ふる途である。こんな風に直接に神のためになることが幾らもあるであらう。救はれて神の子供となつたものは、其の基督より受けた心に由て此のために自づから動き、動いて自分をも發達させるのである。神の子供は父のため父の國のためには水火も辭せぬのが自然である。

三、他人に對する生活

三、他人に對する生活

基督に由て救はれて神の子供となつたものは、其の内にある新しき生命を用らかせて人に對しては美はしい生活をする。神の生命が内に在るのだから、神

神の子供として人に對す

が人に對して動く如く動くのである。

基督は弟子等に向つて、汝等は神に對して其の子であることを自覺して、賴りもし從ひもし平和も得なければならぬと敎へ玉ふたが、また人に對しても神の子供たることを自覺して生きて行かねばならぬと敎へ玉ふた。基督の生活は其であつた。我は人の子であると自覺して人に對するときには、萬事が人を目安にする。人が目を打ち潰せばこちらも相手の目を打ちつぶしてやる、人がこちらの齒を打ち折るならば、此方も齒を打ち折つてやる。其が當り前のことである。然し神の子供として神の心を腹の内に持て人に對すれば萬事が違ふ。神は其日を善き者にも惡しき者にも照らせ、雨を義者にも不義者にもふらせて居る。神の子たる者は自分を愛する者を愛するは勿論、自分を愛せぬ者、自分に敵する者までも愛し、凡て人を見ず、自分より進むで善をするのである。此れが基督敎生活の根本の特色である。

人間の諸の關係

さて左樣いふ風に基督の精神を現はして世の中に生き人に對するとしても、人に對する關係は色々あるから、一々其を心得るのは大變の骨折である。古から人類は人に對する道を考へ、樣々の德を考へ出して居た。孔子は五常の道を說いた。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありと云ふのであつた。此は實によく考へたものである。斯ういふ風に父子の間、君臣の間、夫婦の間、長幼の間、朋友の間、それ〴〵幾分づゝ異つた道があるに相違ない。君臣の間の道を直ちに夫婦の間に行ふ譯には行かないであらう。そこで人は人と人との間の色々の關係を考へて、みなそれ〴〵道を盡すことを心がけたのである。

基督敎の生活に於ても、親に對し、子に對し、君に對し、臣に對するなど、みな其れ〴〵道があることは勿論である。神の子供は何れに向つても神の心を以て對するのであるから、矢張そこには其れ〴〵の道が出來る。其はどういふ

ものであらうか。聖書に敎へてあるであらうか。然り、聖書の中にも、父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の間などの道は所々に敎へてある。みな神の子供の精神の現はれて用く途であつて、基督の徒の行ふべきものである。

然しながら基督の徒が、父子、君臣、夫婦、朋友、其他に對する道を行ふに當つて、聖書を獵つて一々敎訓の句を引き出し、其を行はうとしたり、行つて滿足したりしては甚だ不十分である。特に舊約の中の言などを其のまゝ引き出して、我等の社會にあてはめやうなどするのは大間違ひである。聖書の中にある其等の誡律は、其等の文書の書かれた時代の事情の中に、基督の精神を行ひ、神の靈を實現すればどういふ風になるかを示したものである。けれども聖書の時代と後の時代とは事情が大いに變つて居る。其故聖書の時代に人と人との間に行つて可かつた所を、其のまゝ後の時代に行ふならば、其は却つて善でないことも少くない。舊約の中の誡などは特に左樣であ

る。元來其樣に人の一々の行をどうせよ斯うせよと敎へた所が聖書には行き屆いて居るといはれぬのである。其故聖書の中に父子の間は斯うせよと言てある、君臣の間は斯うせよと言てあると言ひ、基督の徒が其の文字に形はれたまゝを守らうとしたり、守つて滿足したり、或は反對者がそんな文字を捕へて基督敎を非難したりするのは、共に大いなる誤りである。

基督敎の萬世不易な所は聖書の文字でなくして、其の文字の底にある精神である。又聖書時代の基督敎道德でなくして、其の道德の根にある生命である。聖書時代の世界の事情の中に基督の精神を實現すれば、聖書の中にある父子の道、主僕の道、君臣の道となるのであつて、即ち其の時代の其等の道となつて現はれ出た根本の生命が尊いのである。生命さへあらば花は咲く。

然らば其の根本の生命は何であるか。其は即ち愛である。愛は神の心にして、他人に對して好い感じをもち、他人の幸福を計ることである。これが基督の精

道の根本の生命

神となり、此れが基督の徒の靈に充ちて居るのである。此心あらば其で萬の道は全い。獨逸の或學者は愛は人間の社會原理だといつた。即ち人間が家でも國でも其他でも社會といふものを造つて居るのは、全く愛の力に由てゞある。愛がないときは人は一人〳〵破羅〳〵であつて、社會といふものは出來ぬ。愛する時社會が出來、其が幸福であり、發達する。道德は移り變る、中世の道德は今日には行はれぬし、西洋の道德は東洋には用をせぬことが少くない。然し愛は易らぬ、何所にもある。愛さへあらば中世には其に由て中世道德が出來、今日には今日の道德が出來るといつた。確に愛はさういふものである。

基督は其を見た。其故基督は愛を以て人に對する精神とすることを常に說いた。汝心を盡し精神を盡し力を盡して主たる汝の神を愛すべし、此れ第一にして大いなる誡なり、第二も之に同じ、己れの如く汝の隣を愛すべしと、舊約の言を引て之を人間生活の原則として示された。基督が愛の道を極力說いたのは、

其の一代記の何れにも見え、何所にも見えて居る。基督の新しき誡は愛だとなつて居る。基督は神は慈愛の父であるから、人は此の父を信じ、父の心と一つになつて世に生き、さながら廣い貯水池の水を、無數の鐵管に由て市中に注ぎ出だすやうに、基督の徒は神の靈の無限の愛の海につながり、其の愛を世に注ぎ出だすべきものであると考へたのである。

固より愛と言ても、唯だ何でもかでも氣に入るといふやうな愛は眞の愛ではない。人間同志の愛は動もすれば溺れた愛に陷り易い。母は子を愛する餘り、子が惡いことをしても其を我子のすることゆゑ善いと思ふ、子が間違つた願を持て居ても其を遂げさせてやる。然し是は眞の愛ではない。子の幸を計る所以ではない。却つて子を害する。眞の愛は道理に合た愛である。どこまで行つても害のない愛である。神は義にして愛である。即ち正い道理に合た愛である。神の子供が神の海より受けて持て居り、世に注ぎ出だす愛も、此の愛でなくて

はならぬ。

家の中の道

そこで此の愛を實現するときには、先づ家の中は如何になるであらうか。親と子の間は心が一致し、喜び溢れ、共に善を勵むに違ひない。夫婦の間は夫唱へ妻和し、所謂琴瑟和合の幸福に充つるであらう。兄弟の間は志も合ひ同情も行き屆くであらう。家族一同がそれ〳〵背後に神を控へ、神を家の中に注ぎ出だすならば、其の家の樂みは無限である。現在の者は勿論幸ひであるが、其の中で生ひ立ち、其の中から世に出でて行く子孫は、末代までも美はしい人格となつて行くのである。基督の徒が其の内にある生命を用かせればこんなものになる。

社會に於ける道

家の外では社會は如何になるか。親族の間、友人の間、或は官衙に於て、會社に於て、同業者の間に於て、神の愛を實現したならば、其の社會は美はしくなり、幸福が充つるのである。初は唯だ一人之を行つて居るかも知れぬが、其

の一人は其の周圍に光を發散するのであり、花を撒き散らすのであつて、漸くにして其の周圍の人々を喜ばせ、終に之を同じ心とし、一體を幸にするのである。もし社會に愛が普く行はれたら、人生の苦痛や不幸は根こそぎ無くなる。たま〳〵かゝる者があつても、愛ある社會の中ならば、其の苦さを殆ど味はずして終れるのである。神の子供が神の生命を實現すれば社會は斯うなる。斯う實現せねばならぬ。

國は如何になるか。君も臣も大臣も百姓も、甲の市の人も乙の地方の人も神の子供として神を實現して來るならば、其の間に何等の不吉の雲も起りやうがない。國の中の不幸は何時でも私を求め罪を犯すから起る。神を實現すれば最も幸である。國體や政體がどうであらうが、種姓がどうであらうが、そんな事は問題にならなくなる。專制國でも共和國でも神の子供の國であるならば何れも幸ひである。專制國の君主が神の子供として神の心を國內に行つて見玉

へ。人民は實に幸でないか。或は共和國として人民がみな神の子供として相和し、賢明の人物を大統領に擧げて政治を托するといふやうならば、また幸福ではないか。之に反して神の子供たらぬものが專制の君になつたら如何。或は共和國でも人民が神の子供たらず、互に憎み妬み利己心で動いて居たら如何。決して幸ではない。世界にそんな例は澤山ある。それで我國の如きは、國家の最も順當に發達したものである。我國は一種族の擴がつて境土を有するに至つたものである。我等の家の氏を溯つて行くと何れも由緒正しく、ちやんと天孫種族の家に歸して仕舞ふ。即ち日本民族は天孫氏が、其の幹から分れては分れて出て、枝となり葉となり、此の日本全國の隅々にまで行きわたつたのである。勿論朝鮮から來た者、支那から來たもの、其他も加はつては居るが、其は注射された血漿のやうに、民族といふ身體に這入て其の成分に化して仕舞つた。日本民族は一族である。而して此の一族の大本家が皇室である。皇室の長

たる天皇は此の大いなる我等の家の家長でる。我等は此の大家族の家長に對する愛を以て天皇に對し奉つるのである。神の子たる者どもの愛が茲に用ければ至極美はしいものとなるのである。皇室より下は同胞に對する道また神の子供の道であるから、甚だ樂しい。

然し愛の用は家や國の内にのみ限られぬ。人類はみな神の子供であるから、神の子供たるものは誰に對しても愛を用らかせる。そこで世界の人を愛する。此心が世界を擧つて相交はり、互に幸福を計り合ひ、延いて人類全體の幸福を進めるといふことになる。外國に傳道するなどいふことは、神の子として神の愛を心に抱き、而して外國の人に對するから、其の精神の狀態の振はぬのを見其の諸〳〵の不幸を見、同情に堪へず、之を救ふて幸にしてやりたいといふ眞心から起るのである。赤十字の事業の如きも、神の子供として其の内に在る神の生命を世に用かせるより起つたのである。然らば基督の徒は博く愛するから

親や兄弟や内國人には薄情なのかと言へば、どう考へてもそんな理窟はない。博く他を愛することの出來る者なら、近い所は其の愛が最も强く用くのは當然である。此は前の家に關する所國に關する所を考へれば直ぐ分る。或は基督の徒は外國と戰爭せぬといふことになるだらうと謂ふ人もあるが、成程戰爭は、基督の徒の精神に反對した事で、神の子供がそんな恐ろしいことを行はう筈はない。人類をみな神の子供と信ずる基督の徒は、互に愛あるのみである。其で飽くまで平和を喜び、世界は全く戰爭の無くなることを志し之がために努力する。けれども悲いことには世界はまだ不完全である。そこでどうした機にか戰爭は起る。其の場合には國のため人類のため戰はざるを得ぬ。此が愛の道である。國が亡びて仕舞つては我等の同胞は悲慘此上もない。人の社會といふものゝ完全に形を成して居るのは今の所では唯だ國家といふものだけであるから一の國が亡びては幾千萬幾億萬の人民は不幸に陷るのである。之を防ぎ之を益

〻幸福にするためには、戰はねばならぬ。それから世界に惡い國民があり惡い君があつて、自分の權力を張らんため、慾を達せんために世界を蹂躙するやうな場合には、其に委せて置いては全人類は今日も未來も不幸に陷る。其場合には空しく彼の刀劍を持て荒れ廻るに委せて置く譯には行かぬ。此の狂人の手を抑へ其の劍を奪つて押しこめてやらねばならぬ。これが戰爭である。だから一概に戰爭が惡いとは言へぬ。基督の徒はどんなことがあつても戰爭はせぬといふ者ではない。然し人類は戰爭のないやうになるために努力するものである。要するに愛を世界に行ふのである。

死者に對する道

愛は死だ人にも用く。勿論それが用いて對手にどういふ影響を及ぼすものかは分らぬ。然し無益のことにしても人情の自然として其がある。東洋人は特に祖先を思ふ。死だ子を思ひ、親を思ひ、祖父母を思ひ、遠い祖を思ふ。それで此の心をあらはして死者の墓を清潔にし、遺物を保存し、其の人を紀念する

ことなどは自然に起ることであつて一向差支へはない。神社なども何か由緒の正しいものであり、眞に立派な人物を紀念するための堂宇であるならば、其を大切にし、之に尊敬の心を表はし、紀念日などに其所に行て見るなどは可いことである。唯だ其等を神の如くに拜して、之に祈りなどするは愚であつて人心を卑屈にし、道德を低くするのである。一體死者を拜むといふのは、人類のまだ野蠻な時代、死者が尙生きて徘徊して居ると信じて之を拜むだから始まつたことで、劣等の宗敎心の遺物である。人間の力や德は低い者であるのに、死だからとて其を拜むで祈るやうでは、拜む方の人間は低くなるばかりで、決して高いものになる筈はないのである。

四　自己の精神の狀態

救はれて神の子とせられた者は、其の生命が上は神に對して動いて從順とな

四、自己の精神の狀態

り、横は人に對して動いて愛となるが、自分自身の中では、また幸福な精神として湛へて居る。神の子供の精神は自由である。凡て身體から來る慾や、身の周圍の事情に由て囚へられず、其等の力を脱け出て、神の心を以て善いと思ふやうに思ひ行ふものであるから、極めて自由にして何ものにも動かされぬ。從つて平安である。世の波風のために上つたり下つたり思ひ煩つたりせぬのである。又常に愛で充ちて居るから喜びがある。人を愛する心の強い者ほど心が喜びに充つる。子のない人には喜びが少く子のある人には喜びが多いではないか。

自由

平安喜樂

それから精神が充實して居るから、志を立てる時には大いなる力がある。困難なる事でも貫いて仕遂げるし、他の人を思ふときに感化が強く、其人を動かさずには居られぬ。基督は神の子供の精神の幸の幾つを示して、心の貧しき者は幸なり、天國は其人の物なればなり、哀む者（弱きを知て）は幸なり、慰めを得べければなり、柔和なる者は幸なり、地を嗣ぐことを得べけれ

有能

其他

ばなり、飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は幸なり飽くことを得べければなり、矜恤ある者は幸なり矜恤を得べければなり、心の清き者は幸なり神を見ることを得べければなり、平和を求むる者は福なり、神の子と稱へらるべければなり、義のために苦めらるゝ者は幸なり天國は即ち其人のものなればなりと語り玉ふた。基督の徒の内には凡てかういふ種類の精神上の幸が充ちて居る。基督の徒の生命はこんな幸を造り出して居るのである。凡て他の修養などで得られぬものは基督を信ずるに由て得られる。

五、教會

五　教　會

信仰は人の志であつて、即ち人の心の底から生え出したものである。其故信仰を本とする基督教は實に人の一人〳〵のものである。親が基督教の信者だからとて子が基督の徒といふものでなく、友人が信者だとて、他の友人が信者と

いふ譯のものではない。人は一人〳〵各々基督を信じ、名々神の子供とならねばならぬ。

基督の徒はみな一體

けれども基督の徒は誰も彼も同じ基督の感化に動かされ、同じ神を慕ひ、同じ基督を仰いて居るものである。そこで信者と信者との心は一つに合つて、神の靈、基督の精神が貫いて居る。一人の信者が善いと思ふことは、他の信者も善いと思ふ、一人の信者がしやうと思ふことは他の信者も同じやうに思ふ。基督の徒は互に顔は異り身は分れて居るが、誰の人格の蓋をあけても、其の下には一の基督の心が流れて居る。基督はそこで自分と信者全體との關係を葡萄の樹に譬へた。自分は幹であつて信者の各々は枝である、一の生命が連つて居ると言はれた。パウロは基督は首であつて信者の凡ては手足や胴を見たやうだと言た。基督の徒はみな一體のものである。之を敎會と言て居る。基督の徒は誰も此の敎會について居るものである。

敎會に由て生命を實現す

基督の徒が靈の中に在る神の生命を世に用かせるには、前に述べたやうに、自分一人で之を用らかせることをするのであるが、然し其と共に此の敎會といふものに由て用らかせることが大切である。神に事へるのも自分一人でも事へるが、敎會全體で事へる、世の惡の力を押しのけ基督の心を押し通すのも自分一人でもするが敎會全體でするといふ風にして行かねばならぬ。信仰も敎會の中に信仰があり、道德も敎會の中に道德がある。一人の信仰ではまだ神に對する生活が完全に現はれぬ。一人の道德ではまだ人に對する基督の道が完全に出來上らぬ。然し基督の徒が聯つて來れば、其の間に湛へたものは基督の生命であるから、其から發する所の用きは基督の用きをおよそ完全に顯はすことが出來る。

一つ〳〵の敎會

かく基督の敎會は全世界に唯だ一つであつて、基督を信ずる者は誰でも同じ敎會に入た者であるが、然し其では實際に用きが無いものになるので、基督の

徒は其れ其れ便宜や歴史や事情で互に寄り合つて、色々名の違ひ又多少行き途の異つた敎會を澤山立てゝ居る。其は勢ひの當に然るべきことで、考へを同じうし氣風を同じうした者が、あちらに一群こちらに一群寄り合つたのである。故にどれも基督の徒の群であり、基督の敎會の一部分である。だから何程派が分れて居たとて些も構ふことはないのである。基督の徒は其の内のどれにでも入れば、其で基督の敎會に居る譯である。

敎會に加はるの要

基督の徒は基督を信じさへすれば、敎會に入たものに相違ないのであるが、また此の人間が立てゝ居る一つ〳〵の敎會の何れかに加はる事が大切である。何となれば先づ此れは自然である。基督の宗敎は決して他人を無視せぬ。人を愛する。人を愛するとき基督の徒同志が相愛し相結び社を成さぬ筈がない。同じ枝葉たる意識があれば必ず一緒に集るのである。他の世界と戰ふに當つても十指の代る〳〵彈くよりは一手の一時に打つに若かぬ譯である。其から人は敎

會に加はつて眞に人を愛する心も養はれる。神の子供として兄弟姉妹たるものが集る所には自然愛が動き自分も愛の人となり他より慰も受けるのである。信仰も敎會には一人〳〵で得られぬものが充ちて居る。一同の心が等しく神に向いて上つて居るならば、其の勢は當るべからざるものがあつて、大抵な冷いものも熱して來る。其で敎會を立て、心の合た同志が結び合ひ、互に愛の道を行ひ、共に神を拜し、共に神の心を行ひ、共に神の生命を他に移すことを計り、共に世の惡と戰ひ、共に世を清くし幸福にするのである。祈禱の如きさへ、一人で祈らねばならぬことは勿論であるし、一人で祈れば福を受けること豐であるが、敎會員が共に祈るときには、祈の心が擴げられ、祈の題が豐になり、祈の力が强い。一同の心が一つに神に向ひ燃え上つて居るならば、丁度盛んなる焚火の所に來たものは、小さな紙片などは直ちに上に吹き上げられるやうに、其所に近づいた者はみな心を天に押し上げられる。敎會の禮拜に未信者を動か

して信仰を起させる力があるのは其に因するのである。

教會を無みする主義などいふものは飛でもないことである。第一教會を結ばずして基督の徒が居られるか。もし教會を結ばずして居るならば其は必ず主我な者であるに相違ない。神の子供たるものは必ず他人と提携し、其の同一體となつて居る實を現はし、共に神を現はさうとするは定つて居る。其から孤獨では信仰は自己流になる。また神より人に入り、神の靈を受けた人から受ける慰とか奬ましとか感化とかいふものは、孤獨では受けるに途がない。神は我を救ひ玉へる如く他人をも救ふて居る。他人の中に神が入て居る。神は間接に横より他人に由て我等を慰め奬ますのである。其は教會なくしては得られぬ。其故教會に連らぬ人は事實上我儘であつて、精神が發達して居ない。基督らしくないことが多い。且つ又一人では危いのが常である。人と共に波風に當るのが安全である。此等の色々の理由によつて、基督の徒は何れかの教會に加はり、自

教會を無みするの非

分自身が獨りで神の生命を現はして用らかすると共に、教會に因て之を用らかすることをしなくてはならぬ。此れが基督の徒の道である。

基督の徒は基督を信じて神の德たる正義と愛とを注ぎ入れられ、其の靈が正義と愛の人格に化して仕舞つたものであるから、一擧手一投足にも、此の人格を用かせて外に行ふものであり、行はねばならぬものである。其故神に對しては信賴、服從の生活を送り、人に對しては愛の生活をなし、自分自身の精神に自由が圓滿に働き平和充ち喜び溢れて居るべきものである。而してかゝる生活をなすは自分一人に由てなすと同時に、又同志同心の基督の徒同志と共になすのであつて、即ち教會に於て基督の生命を實現するのである。

新生命を實現せよ

宗教は世界に普く在るものであつて其は人間の性に出て居る。基督教は矢張此の人間必然の產物たる宗教の極まつたものである。基督教は人生と最も密

結末概括

接な關係のあるものであり、又道理であつて、何人も之を奉ぜねばならぬものである。基督教は神を信ずるものであるが、神は必ず存在しなくてはならぬ。神は基督の示せる如く我等の父でなくてはならぬ。人は其故に神の子である。神に從ひ神に一致すべきものであつて、さうするならば幸福は此世にも永遠にも無限であるべき筈のものである。然るに人は事實に於て神の子たる幸を有せず、諸〻の不幸の中に沈むで居る。然し其の原因は人間自身の方寸の内にある心ざし如何に由るので、人は自ら神の心に反したる事をなすため、品性墮落し、自ら不幸に陷り、世界をも禍ひして居るのである。之より救はれて人の人たる面目に歸り、自ら幸福になり、世を幸福にせねばならぬ。所が此れは他の何等の途に由ても得られぬ。然るに耶蘇基督は現はれて人を救ひ、眞の幸福に至らせんために努力した。彼は之がために一生を献げ、非常なる苦勞を見、終に十字架にかゝつた。我等之に由り彼の教を信じて神の父なることを信じ、之に

頼り、之に委せ、又基督が事實の生活にて顯はした所に由て、神の愛が如何ばかり深く切なかを見、更に基督の今尚生きて居る靈に接し、其の無限の壓力の感化の波に打たれ、自らの心を開いて之を受けるならば、基督の心は我等の内に流れ入り、我等は基督と同じい神の子たる人格となつて、茲に神との間の關係は最も圓滿となり、又諸〻の罪の結果より免れて幸ひ此上もなくなるのである。其故我等は基督を信じ、其の示した神に頼り、基督の人格の力を一杯に受けて、新らしき人、神の子にならねばならぬ。神の子となつて自分の中に充ちて居る神の生命を世の中で實際に用かせ、自ら幸福であり、又世界をも幸福にせねばならぬ。此れが基督教である。

基督教神髓　終

大正四年九月一五日印刷
大正四年九月一八日發行

＝定價八拾錢＝

著作者　富永德磨　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助　横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉　東京市京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社東京支店　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　警醒社書店　（振替東京五五三　電話新橋一五八七）

不許複製

富永德磨著書目錄並推薦の言葉

基督の徒の思想

四六判洋布製
定價八十錢
郵税八錢

目次□基督の徒とは何ぞや□神の人格の中心□神の前の一人□神に委せよ□神に依る經驗□人間根本の救□救は天より□生活の目標□代理の苦勞□死を奬す□靈魂の新裝□靈と戰爭□常世の春（世を去りし靈を懷ふ）

著者が基督を愛し、人の靈魂を愛し、精神を傾注して書きなしたるもの。熱烈なる信仰は融けて、新鮮にして、豐富清醇なる思想となる、悉く靈味を以て溢れ、詩趣を以て充ち、而して字々實際、句々適切。一々人の肺腑を衝く。毎篇の文章を讀みて、大いなる奬勵を得、深き慰藉を感じ、新光明に照らされし人多く、殆ど之を諳誦せる人々もあり。信仰修養上の最良書となす。

基督教と國家及道德

菊判紙裝
定價九十五錢
郵税金八錢

外は不信者の誤解誣謗を縱横に辯駁し、内は内外基督信徒の道德的迷謬を峻嚴に打破し、全く新見地より基督教道德を説明發揚せるものなり。

基督教新解

菊判紙裝
定價八十錢
郵税金八錢

基督教を新らしき心にて解し、之を説明したるもの、組織最も整ひ、理義整然として何人をも首肯せしむ。

基督教の根本問題

菊判洋布製箱入
定價一圓六十錢
郵税金十二錢

基督教の根本義を組織的に説明せるものにて、研究周到、理義明徹、而して敬虔的情操横溢す。其現はるゝや教界内外の視聽を聳動し、我國基督教界空前の大著述、研究的精神と、信仰的靈味と全卷に調和せるもの、現代の誇として永く後世に傳ふべきもの。我國基督教の前途に光明を投ずるものなどと評せらる。基督教思想界は之に因て一新生面を開きつゝあり。

325
371

終